
地球人亡命中！

角宿あるは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地球人亡命中！

【Nコード】

N1531W

【作者名】

角宿あるは

【あらすじ】

とある理由で千歳の父親と共に故郷地球から逃げることになった、半分日本人の少女リリア。科学兵器と発現したばかりの微弱な特殊能力を使い、魔術文明が栄える異世界ハルシェで直面する様々な危機を、ハルシェ人少年シオンと協力して乗り越えていく。そして明らかになる、多元宇宙の真実――

（★作者の自己満足に満ちた異世界サイエンスファンタジーです）

prologue さよなら

【地球 南極点上空】

（こんな場所が、正常者に発見されずに残っているとね。所詮、連中にとって魔法は専門外か……）

異世界へ通じる門、レシュティアの前に、少女は立っていた。発光する門を見上げるその瞳には、未知なる世界への冒険に対する期待の色など微塵も無い。

（はぁ……あたしも正常者のままでいたかったな……）

門を取り巻くこの円盤上の空間は、放射線で満ちあふれる外部の真空とは完全に隔絶されているようだ。

少女の体を、乾いた生暖かい1気圧の空気が包む。不快ではないが、かといって心地よいわけでもない。

少女は、足下に転がる1人の青年を冷たい目で見下ろした。彼に意識はない。

少女の濃褐色の瞳が、スマイレ色に淡く光る。

サイコキネシスの発動。

青年の体が浮かび上がった。

「お先にどうぞ」

言下に、青年は実体のない門の中に乱暴に放り込まれた。

門が光ると同時に、青年の存在は地球から消え去った。

（さてと……）

少女は円盤の縁まで歩いていった。

眼下に広がる、青い惑星。

半円部分しか光っていないが、絶景には違いない。

死ぬわけでもないのに、少女の頭の中を、その惑星で過ごした日々の思い出が走馬燈のように流れていく。

「今までありがとう……大好きだよ、地球^{アース}」

恋人に囁くように、少女は愛おしげな笑みを浮かべて感謝を口にした。

名残惜しそうに踵を返して門の前に戻った少女は、目を閉じるとしばしの間、母なる地球の重力を全身全霊で感じた。

そして、目を閉じたまま、そっと呟く。

「さよなら……」

少女は倒れ込むように、光の渦巻く門の中に入った。

地球最後の魔術師が、異世界へと旅立った――

prologue さよなら（後書き）

ご感想お待ちしております。

辛辣な批評も大歓迎です。

誤字、脱字、矛盾、その他意味不明な点がありましたらご指摘いただけるとうれしいです。

01 予期せぬ来訪者

【ハルシエ テレイジア洋】

四方を縁取る水平線は、真っ暗な海と夜空を隔てるのに苦勞していた。

潮風に引きずられて波立つ水面は、満天の星空を映すという水の天職を果たせずにいる。

ハルシエの月“ブルウン”は、もう少しで昇る。自ら光を発する彼ならば、その桁違いの光度で海中に像を結ばせることができるだろう。しかし今はまだ、闇に飲まれた大海原が広がるだけだった。

そんな海の上を、互いに幾本もの鎖で繋がれて並行して進んでいる巨船が2隻。

黒い帆を広げた一隻は、テレイジア洋を行き来する船を長年餌食としてきた、ジェヴィア海賊団の船“霹靂号”^{へきれき}。

そしてその右隣の、白い帆を広げた一隻は、商船“トラキアル号”。海賊たちの今日の収獲だ。

霹靂号では、たくさんの灯火の下、略奪の成功を祝って盛大に酒宴が行われていた。

船員が皆、杯を手にとっているわけではない。数人いる海賊見習いたちは、2隻の船に分かれて、見張りや掃除、今日奴隷となった者たちへ食事を配ったりと、せわしなく働いていた。

見習いになって数十日になる16歳の少年アレンも例外ではなく、不味そうな食事が盛られた皿を、トラキアル号のマストに鎖で拘束されている奴隷たちに配ってまわっていた。

——彼の本名がシオン・アーミラーであることを知っている人間は、海賊たちの中にも、奴隷たちの中にもいない。

「……ほら」

そう言いながら、アレン、もといシオンが皿を差し出すと、奴隷たちは身を強ばらせ、顔をひきつけて怯えた。

彼らは今や商品である以上、殺されたり傷つけられたりすることはないが、痛めつけられないとは限らない。しかも相手は血も涙もない海賊。当然の反応だ。

シオンよりずっと若い（幼いと言った方がいいだろう）子供の姿もいくつも見える。この船は旅客船も兼ねていたのだろうか。

彼らのほとんどは親らしき大人にすぎりついて、恐怖からさめざめと泣いている。

子供は高く売れる、と年長の海賊が言っていた。最終的には大人よりも長い間働かせることができるから、という単純な理屈だ。彼らの未来は暗く、閉ざされている。

シオンの心に罪悪感が溢れてきた。そして、自分が彼らの立場だったらどんな気分か、それを想像しようとしないうちに海賊たちに憎悪を抱いた。

尤も今は、アレンという仮面をかぶっている今は、シオンも海賊の一員で、奴隷たちの畏怖と憎悪の対象だ。

シオンは優しく声をかけて慰めてあげたいのをぐっところえて、冷徹な仮面を被り続けた。そうするしかないのだ。

紺色の髪の子——屈強そうな体つきから判断するに、トラキアル号の船乗りだろう——にシオンが夕食を手渡そうとした時、事は起こった。

男は差し出された木皿をシオンの手ごとはいった。

全く予想外の出来事だったので、シオンは回避行動がとれず、衝撃で皿が覆り、木製の甲板に料理がぶちまけられた。一瞬間を置いて、木皿が甲板に当たり、乾いた音が響いた。

もう一方の手で持っていた盆を落とさなかったことから、シオン

の身体能力の高さが窺える。だが男はそんなことを意に介さず、

「てめえらクズ共から施しなんてうけねえよ！」

と怒鳴った。

その声は大きく、隣の高賊船まで聞こえてしまった。

案の定、さっきまで大騒ぎしていた霹靂号が一瞬にして沈黙に包まれた。

（何を考えているんだ、この人？）

シオンは呆れながら思った。

自分たち高賊を罵倒したところで、返ってくるのは暴力による制裁のみ。事によると、不良在庫の処分という名の処刑が行われることもある。

何か考えがあるのか、あるいはただの馬鹿か……。恐らく後者だ。この状況で打開策など無い。

「おいアレ、ちよつと教育してやれ！」

高賊船から愉悅じみた声が飛んできた。

先輩の高賊たち、同輩の高賊見習いたち、そして奴隷たち、全員がシオンの方に目を向けていた。

一方で、男は依然としてシオンに挑発的な表情を向けている。彼の両隣に拘束されている商人らしき2人は、巻き添えを食わないかと戦々恐々だった。

やりたくない。そう思った。だが、ここで従わなければ、自分は信用を失う。十中八九、高賊団から追放されるだろう。海に投げ捨てられる可能性もある。

「了解です」

そう淡白に返答すると、シオンは少し離れたところに盆を置いて、男の鳩尾を思い切り殴った。男は短い呻き声を発して気絶した。

口笛が聞こえた。ジェヴィア高賊団の頭、ナイゼル・ジェヴィアのものだ。

「いいパンチだ、アレ」

「ありがとうございます」

シオンは努めて得意げな笑顔を作った。悪人らしさが板に付いたように見えているはずだ。鏡を前に散々練習した成果をシオンは期待した。

★☆☆★

宴が終わり、ほとんどの海賊たちが寝静まった頃。

2隻の船を繋ぐ鎖の一本を伝って霹靂号に乗り移ったシオンは、マストの上部に取り付けられた櫓の上で、見張り番をしていた。

いくら当番とはいえ、さっきまでシオンはトラキアル号にいたのだから、そのままそこで別の仕事を与えられた方が効率的なのだが、どうもそれが海賊たちにはわからなかったらしい。見習いが口答えするのは海賊の世界では御法度だから、シオンは何も言わずに従った。

隣では先輩の海賊が、酔いによる眠気と戦っている。魔術師は酔いにくく、酔いが醒めるのも早いはずから、彼は余程大量に飲んだのだろう。

こんな状態で見習いたちの監督が務まるのだろうか、とシオンは呆れた。見習いたちの反乱を防止するための役割でもあるというのに。

（まあ、危機観念に欠けてくれるのは、こっちとしてはありがたいけど）

シオンはそう心の中で呟いた。

シオン・アーミラー。

彼の正体は、クレイティラム連合王国軍特務隊から送り込まれたスパイだ。

作戦内容は、ジェヴィア海賊団の首領ナイゼル・ジェヴィアが所

有する〈封魔弓〉の秘密を探り、奪取すること。

ジェヴィア海賊団がトレイジア洋でその名を轟かせているのは、その戦闘能力の高さもさることながら、何より、首領のジェヴィアが〈封魔弓〉と呼ばれる魔導具を持っていることによる。

〈封魔弓〉で人肉を射ることはできない。それどころか、矢を放つことすらできない。弓弦ゆみづるが無いのだから。

だがどういうわけか、射手が弓を放つ動作をすると、見えない“何か”が飛んで行き、的となった場所ではあらゆる魔術が封じられる。

この世界の船の主な武装は大砲。火薬というものが普及していないこの世界で、砲丸を飛ばす手段は魔術のみ。

また、大抵の船には遠隔攻撃魔術を得意とする者が一人は控えている。

さらに、帆船には追加推進力として船尾に外輪がついており、これを回転させるのもやはり魔術だ。

よって一方的に魔術が封じられれば、依然として魔術が使える側のアドバンテージはとてつもなく大きい。

魔術を封じた船に近づけば、こちらも魔術が使えなくなってしまふ。だが、ジェヴィア海賊団は主に非魔術戦闘、つまり白兵戦に熟練した戦士で構成されているため、むしろ接近してからが彼らの本領発揮だ。

防御の弱い商船には、瞬く間に食らいつき、クレイティラムを初めとするトレイジア洋周辺国が送り込んだ討伐艦隊からは、瞬く間に逃げ仰せる。

これこそが、ジェヴィア海賊団を長年に渡って“海の覇者”ゆえんたらしめている所以である。

島国クレイティラムは、トレイジア洋での交易の安全を確保するべく、このジェヴィア海賊団を排除する必要がある。だが現状では、

追加推進力を一方的に止められて簡単に逃げられてしまう。だからまずは、例の〈封魔弓〉を奪わなければならない。

そういうわけでシオンが送り込まれたわけだが、クレイティラムには〈封魔弓〉を欲するもう一つの理由がある。

クレイティラムは魔術先進国。進んだ魔法研究とその実用化のおかげで、世界の中心と呼んでも過言ではない程の国力を持つに至った。クレイティラムで設定された紀元〈ハルシェ暦〉が世界中で使われているという事実が、クレイティラムの強大な影響力を物語っている。

そんなこの国が、魔術を封じる〈封魔弓〉を野放しにしておきたくないと思い、今後またそういう封魔具が出現したときのために、対抗策を探るべく、〈封魔弓〉を研究したいと思うのも納得できる。

遂に沈没していびきをかき始めた隣の海賊にシオンは目をやった。彼は櫓の手すりにもたれかかって、唾液を櫓の床板に固定された小さな木箱の上に垂らしている。汚い。

少し前に彼から聞いた話だが、あの弓は何度か盗まれたことがあるらしい。だがいつも、しばらくするとジェヴィアの手元に戻ってくるそうだ。

次に陸に寄った時、隙をついて弓を奪い、小舟で脱出しよう。そう考えていたシオンは、それを聞いて計画を練り直すことにした。

それから色々悩んで、〈封魔弓〉を真に奪取するには、所有者であるジェヴィアを殺さなければならない、とシオンは考え始めた。

だがそれは困難を極める。先に述べた通り、ジェヴィア海賊団は白兵戦に秀でていて、その中でも、年齢30近くになる首領の実力は目を見張るところがある。たとえ1対1に持ち込めたとしても、非魔術戦闘で彼に勝つ自信は、シオンには無かった。

抜け目の無いジェヴィアに隙が生まれる絶好の機会を待ち、奇襲をかける。それがシオンの出した結論、当面の予定だった。

シオンはため息混じりに天を見上げた。街の灯火が無い分、そこには故郷よりもずっと明るい星空が広がっている。

あの星々は、この惑星を包含しこの惑星を中心に回転する巨大な球面に張り付いていて、その球面こそが、宇宙の果てである。シオンはそう学校で教わった。

では、その境界面はどうなっているのだろうか？ 黒曜石のように黒くて堅い壁が広がっているのだろうか？ 星の正体は、それに張り付いた光る宝石であると聞いたことがあるが、だとすれば取り外したりできるのだろうか？ いや、そもそも果てなんて本来にあるのだろうか？

星空を見上げる度に、シオンはそんなことを考える。

もしかしたら自分は、科学者に向いているのかもしれない。だが、軍人の方がはるかに需要が高く、はるかに多くの人を救える。それがハルシェの常識で、シオンも納得している。だからこそ、自分の意志で特務隊に入隊したのだ。自分の恵まれた力で、多くの人を守りたい。その一心で今まで頑張ってきた。

実際、この任務が成功すれば、多くの人が救われる。

だが最近シオンは、自分の軍人としての適性を疑い始めていた。この仕事は苦痛でならなかった。

もう任務が始まってもう50日になる。肌は日焼けで焦げ茶色になり、それを見る度に、新発見の毎日だった平和な学業生活が恋しくなる。

さっさとこの仕事を終わらせてしまおうという衝動が不意に走った。

簡単だ、隣のそいつを殺して、すぐに船長室に向かって、ジェヴィアの寝込みを襲えばいい。そう心の声が誘惑してくる。

そんなに簡単に行くはずはない。

敵船が姿をくらます魔術を使って接近するのを防ぐために、今、この船とその周囲には〈封魔弓〉により反魔法領域が展開されている。だから、ジェヴィアの部屋に魔術による罠が仕掛けられている

ということはない。だが、彼は信じられないほど気配に敏感だから、結局は1対1の非魔術戦闘となり、シオンは高確率で負ける。

やはり、待つしかないのだ。

シオンは視線を斜め下、隣の船の甲板に移した。

死んだように眠っている者、さめざめと泣く者、絶望した表情で虚空を見つめる者。奴隷となった人々の中に、星空を愛でる余裕のある者は一人もない。

運良くシオンが作戦を完遂できた時、彼らはどうなっているだろうか。すでに売られた後なら、救い出すのは難しい。売人はジェヴィア海賊団とは別だからだ。

いつ完遂できるかわからないこの状況で、シオンは彼らにとって、希望の光となるにはあまりにも弱々しい存在だ。

シオンは憂鬱な気持ちを慰めるように、視線を空へ戻し、見張りそっちのけで星空の観賞を続けた。

そんな時だった。それが現れたのは。

「え……？」

船の右手の水平線が緑色に淡く光り始めた。

今は真夜中だ。日の出のはずがない。月の出はそろそろだが、そもそも月が昇るのは西、船の前方だ。

程なくして、全天が眩い白色光で満たされた。

フレアアップは一瞬で終わったが、夜空は元通りというわけではなかった。いつの間にか、一本のエメラルドグリーンの光の帯が水平線から伸びており、この場所から遙か東方の上空と思われる位置で途切れていた。

時間差で、クリスタルガラスを打ち合わせたような音が高らかに響く。

（まさかっ!?!）

星々を圧倒する光量のオーロラが、夜空に輝いていた。今のところ消える気配はない。微風そよかぜを受けたカーテンのように、やわらかに揺らいでいる。

南回帰線近くのこの場所では、普通なら見られるはずの無い自然現象。明らかにそれは、不自然現象——魔法現象だった。

「天の息吹だ！」

誰かが叫んだ。トラキアル号で奴隷たちの監視をしていた、シオンと同じ海賊見習いだった。

起きていた奴隷たちが騒さわぎだし、その声で目を覚ました他の奴隷たちも、騒さわ擾じょうに加わる。

〈天の息吹〉。それが示すのは、異世界人の来訪。

数十年前、ハルシエは異世界からの侵攻を受けた。

敵の数は、魔獣と呼ばれる謎の生物を含めてせいぜい2桁だったにも拘らず、それは“大戦争”と呼ぶにふさわしい戦いとなった。

結果的には、各国が臨時同盟を結んで戦ったおかげでハルシエ側が勝利し、敵は撤退、離散したが、それまでに多くのハルシエ人が死んだ。敵の爪痕はひどく深かった。

ここにいる者のほとんどがまだ生まれていない頃の出来事だ。だが、前の世代からその恐ろしさを伝え聞いており、異世界人という存在は現代ハルシエ人にとって盲目的な畏怖の対象となっていた。「騒ぐな」と命令されていたことを奴隷たちが忘れるのも無理はない。

まだオーロラは一筋。つまり、異世界人は今のところ一人しか来ていない。だが、まさか単身異世界観光旅行ではないだろう。ひよつとすると、彼ないし彼女は、後に控える侵攻軍の斥候かもしれない。

もしそうなら、スパイだの海賊だのと言っている場合ではない。シオンは隣の先輩海賊を叩き起こした。

「アルウィンさん、起きてくださいっ！ アルウィンさんっ！」

「……ん、んん！？ 俺は寝てねえぞ！」

慌てて起き直って苦しい嘘を言う先輩海賊に向かって、「ええ、わかってます！」と怒鳴りつつ、シオンは空を指差した。

「……なんだありゃあ？」

「天の息吹です！」

「……」

「侵入者です！」

アルウィンはなかなか状況を飲み込めないようだった。酔いと眠気の二段攻撃を受けているのだから仕方ないといえば仕方ないが、今はそうも言っていられない。

彼の顔に水筒の水でもかけてやろうかとシオンが本気で悩み始めた、その矢先――

2筋目のオーロラが刻まれた。

そしてそれは、この天頂で途切れた。

全員が固まった。騒ぎ声が止んだ。聞こえるのは、波が船腹を打つ音のみ。聞き慣れているはずのその音が、今は、とてつもなく不気味に聞こえた。

「来る……ここに……」

シオンは抑揚のない声で呟いた。

2人目の異世界人が現れる場所。それはどう見ても、この真上だ。そして、着地できる場所は、このあたりには霹靂号とトラキアル号しかない。

恐怖の急激な増大に順応できず沈黙していた奴隷たちの一人が、ついに情けない声色の悲鳴を上げた。

それを皮切りとして、2隻の船にパニックが広がる。早く逃げろと、奴隷たちが口々に叫んだ。海賊側も、奴隷が命令してきたことにとにかくいう余裕の持ち主はいなかった。

アルウィンが櫓に取り付けられた連絡用の真鍮管（船内の至る所へ延びている）の1つの蓋を開けて、その中に向かって警告を発した。

トラキアル号から、奴隷の監視を行っていた見習いたちがこちらを見上げ、大声でうまくし立てて指示を仰いでいる。早口で何を言っているのかわからない。

今この場は混沌の極みだった。そんな中、シオンは割と冷静だった。この手の恐怖の対処法は学校と軍でみっちり叩き込まれていたからだ。

シオンは再び空を見上げた。オーロラの光のせいで、星は微かにしか見えなくなっていた。

まだ人影は見えない。だが、異世界人がもうじき落ちてくるはずだ。降りてくる、の方が正しいかもしれない。数十年前に来た異世界人たちは、どういうわけか魔鏡も使わずに単独で空を飛ぶことができた。それも彼らの恐ろしさの一つだ。

前回と同じ連中なのだろうか。それとも――。

様々な推測をしながら、依然として光り輝いている2筋のオーロラの同一の根本、右手の水平線を見て、シオンはふとあることに気付いた。

（……北？）

オーロラの出所は、南ではなく北。

シオンは船が西に進んでいることを知っていたのだから、オーロラの延びてきた方角が北だということに、もっと早く気付いていたもおかしくはなかった。ただ、先入観がそれを否定していた。

異世界に通じる門と聞いたら、この世界の人間はまず南を思い浮かべる。

100年くらい前までは割と頻繁に（といっても数年に1人くらいの頻度だが）訪れていた友好的な異世界人、そして数十年前の侵略者、どちらも南極から延びるオーロラとともに現れたし、実際に南極点の上空に門のような建造物（「南極門」と呼ばれる）がある

ことが何人もの異世界旅行者によって確認されている。

一方で、北からオーロラが延びてきたことは有史以来一度だけ。また、ラントリス大陸と陸続きの草木が生い茂る南極と違って、孤立した小さな大陸（島と呼ぶ者もいる）である北極は生命の存在しない極寒の氷雪地帯だ。

そういったことから、北に異世界へ通じる門があることを知らない人間がほとんどである。

だが今、オーロラは南ではなく北から延びている。

ハルシエの北極門が通じている世界、それは一つしかない。

その世界へ行き、帰って来た者は1人だけと言われている。

その世界の人間がハルシエを訪れたことは、記録によると一度も無い。

唯一ハルシエとその世界の間を往復できた人物、クレイティラム連合王国の初代国王は、その世界をこう呼んだ。

呪われし世界“ミダンヤード地球”。

そこは、稀少な魔術師が、衆多の非魔術師からの迫害を逃れながら暮らす、悪夢のような非魔法世界。

稀少な非魔術師が、衆多の魔術師によって“呪われし者”の烙印を押されるここハルシエの魔法文明から見れば、その世界はまさに、呪われていた。

たった今やって来た2人の地球人は、その世界の極少数派、つまり魔術師だろう。レシユティア異界間の門は魔素、すなわち“マナ”を有していないと通れない。

先程から下でドタバタと物音がしていたが、ついに、左舷近くの階段から海賊たちが上ってきた。

やや遅れて、船橋楼から〈封魔弓〉を手にしたジェヴィアが現れた。船長室は船橋楼の中の階段でしか通じていないため、こういう

ことになる。

「異世界人はもう見え——」

「誰か落ちてくる！」

ジェヴィアの言葉を遮って、視力自慢のアルウィンが叫んだ。

全員が武器を構え、天を睥睨む。

その間にシオンは、はしごを伝って櫓から降りた。もし戦闘になった場合、あの狭い空間は心許なかったからだ。見張りはアルウィン1人で十分だろう。

シオンがマスト横に降り立って空を見上げると、確かに、白い点が近づいて来ていた。オーロラの光と重なっているため輪郭がぼやけているが、この状況で落ちてくるのはまず異世界人だろう。

「船長、どうしやすか？」

海賊の1人が、落ち着きを失った様子で指示を仰いだ。

対してジェヴィアは、シオン以上に落ち着いていた。

「どうもしなくていい」

彼の答えは、シオン以外の者たちにとっては予想外だったようだ。皆、啞然としている。

「……え、でも、侵略者かもしれませんぜ」

「いや、その可能性は低い。よく見ろ、〈天の息吹〉は北に繋がっている。奴の出身界は恐らく地球だ。」
ミダンヤード

お前ら聞いたことないか？ 魔術師がいない——いや、ほとんどいない世界だよ。数十年前の連中じゃない」

「ですが、危険じゃないとは言い切れませんか？」

別の海賊が言った。

ジェヴィアが得意げな顔で答える。

「言い切れるさ。」

魔術師が数えるほどしかない上に、文明度が低いミダンヤードじゃあ、ろくに魔術技能を磨けやしないだろう。浮遊術なんて使えるわけがない。きっと2人とも、何も考えずに門を通して来たただの馬鹿だ。

危険があるとしたら……そうだな、偶然俺たちの船の上に落ちて甲板に穴を空けられるくらいだろうな」

ジェヴィアの説明を全員が理解したわけではない。だが、彼の落ち着きっぷりを見て、手下の海賊たちは安堵した。

「まあ、念のためその場で待機だ」

「アイアイ、サー」

海賊たち全員が、片足で床板を踏み鳴らした。

シオンは彼の博識さに感心していた。だが同時に、彼の推理に疑問も抱いていた。どうしようもなく予感がするのだ。嵐の予感が。

「なあ、落ちるのが少し遅くないか？」

しばらくして、誰かが呟いた。全員の視線が空に殺到する。

問題の異世界人は、まだ白い点にしか見えない。もういい加減人の形が見えてきてもおかしくないはずなのだが……。確かに落下速度が遅すぎる。魔術を使っているとしたか考えられないほどに。

ジェヴィアが悪態をついた。

「くそっ、弓を使う！ アルウィン、反魔法領域を解除するからへ魔眼鏡」を使って確認しろ」

表情に若干の焦りが浮かんたジェヴィアが叫び、言下にへ封魔弓を構えると、矢を放つ動作を3度した。

マストの上では何かの箱を開ける音がする。アルウィンの唾液が垂れていたあの木箱だろうか。

「……これで大丈夫なはずだ。落下速度は上がったか、アルウィン？」

「まだ調整が――」

「おい、早くしろ」

「は、はい、今済みました」

慣れない手付きでへ魔眼鏡を天に向けたアルウィンは――驚愕で目を見開いた。唇がわなわなと震えている。何に怯えているのだろうか？

黙ったままの手下に、ジェヴィアは怒鳴った。

「どうした？ 報告しろ」

「……」

「おい！」

「12歳くらいの少女が――」

船上にざわめきが広がった。

魔術を自分自身にかけるのは原理的に不可能なので、落下速度を緩めるには《風おこし》の魔術を使って体を浮かせるしかない。だが、それは極めて難度の高い魔術に分類される。そんな幼い少女が浮遊術を会得できるはずがないのだ。ハルシェの常識ならば。

「ほう、これは驚いた。ミデンヤードの魔術師は随分と早熟のようだな。さぞや将来有望だったことだろう、少し勿体無いな」

彼の言う通りだ。普通の16歳の少年と比べてはるかに魔術の才能に恵まれているシオンですら、未だに浮遊術を完成するに至っていない。もし少女が本当に浮遊術を使っているのなら、恐るべき才能だ。

しかし、〈封魔弓〉の前では、どんなに優れた魔術の才能を持っていたようが関係ない。

ジェヴィアを含め海賊たちはすでに、〈封魔弓〉によって浮遊術という翼をもがれた少女が、墜落して死ぬ姿を想像している。空高くにいて、かつ魔術を封じられては、誰であろうと死を待つのみだ。人間に本物の翼は無い。

だが、彼らは気付いていなかった。アルウインの報告に続きがあることを。

「――まだ空を舞っています！」

再び沈黙が空間を支配する。

海の男達に押し寄せかけていた安堵の波は、彼らのところに十分達しないうちに、引き潮の如く去っていった。後に残るのは、さらに増幅された不安と恐怖。

「……馬鹿な、奴はもう魔術を使えないはずだ。もう一度確認しろ

！

「間違ありません！ 上着を翼みたいに使ってこっちに飛んできています！」

ジェヴィアが絶望を顔にまとった。

今まで勝利をもたらし続けてくれた〈封魔弓〉の、突然の裏切り。もがれたのは、彼の牙の方だった。

やや間があって、ジェヴィアが突然、〈封魔弓〉に向かって怒鳴り出した。

「おい、どうなってる、ジルデュ！ 何故効かない？」

ジルデュという名の人間は、シオンの知る限りジェヴィア海賊団の中にはいない。

「船長、一体何を――」

「黙れ！」

海賊の1人が声をかけるが、一喝してそれを遮り、再び〈封魔弓〉――彼はこれを“ジルデュ”と呼んでいるようだった――に怒鳴る。

普段の彼とは似ても似つかない錯乱ぶり。何より“弓”との会話を試みているという病的な異常さに、彼の手下たちは完全に引いていた。

再びジェヴィアが弓を使った。本当に命中しているのかどうかシオン達にはわからないが、ジェヴィアが弓を下ろしたことから確かな手応えがあったのだろう。

「アルウィン！ 降下速度は？」

「駄目です！ 変わりません！」

「畜生っ！ 総員、戦闘態勢をとれ！ 相手は得体の知れない化物だ、死闘を覚悟しろっ！」

まだ混乱している海賊たちは、当惑しながらも言われた通りに自らの心に殺意の火を灯した。

だが、昼間の商船襲撃時とは違って、その火はひどく弱々しかった。

02 大海原の処刑台

【テレジア洋 上空】

まだ海賊たちが少女を全く視認できていない頃。

オーロラを背に、少女は垂直落下していた。

いや、落下という表現は適切ではない。大人しく重力に従ってやるような素直さを、少女は持ち合わせていなかった。普通ではありえない低速で、少女はゆっくりと下へ舞い降りていく。

（まったく、話が違うじゃん。何でこんな海のだ真ん中に……）

首を少し動かして、恨めしそうに一筋目のオーロラを見る少女。

低速故に下方から吹き付ける風は強くないが、少女の舌打ちの音をかき消すには十分だった。

（あいつ、ちゃんと陸に落ちたかな？ 海に落ちてたら回収が面倒だなあ）

少女は本当に面倒くさそうに顔をしかめた。

膝まで届くぶかぶかの白いコートの外ポケットに手を突っ込んだ少女は、その手に収まらないサイズの重厚な双眼鏡を取り出し、遙か下方に見える一つの小さな光点に向けて覗いた。

目に飛び込んできたのは、2隻の帆船。生まれて初めて見る帆船だった。まるでタイムスリップしたかのような気分になり、少しわくわくしたが、それは長くは続かなかった。

倍率を上げると、杯を交わしている人相の悪い男たちと、手足の自由を奪われ絶望に打ちひしがれている人々がはっきりと見えた。

（……海賊？）

黒い帆というのを考慮に入れると、その可能性はさらに高い。

少女の鼻から嘲笑が漏れた。この世界では、未だにこういう野蛮な連中が跋扈ばつこしているのか。

（じゃあ、あの人たちは奴隷かな？）

嫌悪感がむくむくと沸き上がってくる。今少女が目になっているのは、人権無視の現行犯。果たして、これは非合法なものなのか、合法なものなのか。前者であることを少女は切に願った。来たばかりの異世界を、早くから嫌いになりたくなかった。

少女は双眼鏡から目を離し、暗黒の大海原に目を凝らした。他に光、すなわち人気ひとけはない。少女は溜息をついた。できることならあの海賊船に乗船したくなかった。だが、背に腹はかえられない。

文明度の差によって裏付けられた優越感はあるけど、少女は決して下にいるハルシェ人海賊たちを侮っているわけではない。文明も何も無い猛獣を警戒しなければいけないのと同じ要領で、少女は起こりうる戦闘に備える。

「安全装置解除。イオ、エウロパ、ガニメデ、カリスト」
セイフティ

少女が木星の衛星の名を大声で唱える毎に、少女の腰と両足のあたりでコートに隠された4つの何かが、音声認識機能によって一つずつ緑色に光っていった。

（平和的に交渉できたらいいんだけどなあ……まあ無理か）

海賊の相手をしようというのに、少女の顔に怯えは見られなかった。

戦闘になった場合、絶対に勝てるという自信は無い。

少し前だったら、恐くて体の震えが止まらなかっただろう。

だが、今は違った。

恐怖という感情が麻痺していた。

この数ヶ月に少女が経験した恐怖と、それに付随する絶望が、普通の少女の情動の許容量をはるかに超過していたために――

★☆☆★

【テレビジア洋 霹靂号】

初めに延びたオーロラは消え、2筋目のオーロラが夜の闇に飲み

込まれつつあった。逆に、星々はその息を吹き返していく。

ジェヴィアの死戦宣言からそんなに時間は経っていないはずだ。だがシオンには、実際の10倍くらいの時間待ったような気がしていた。

少女は今や、帆柱^{マスト}の先の高さまで来ている。彼女はまるで羽毛のように、揺らぎながらゆっくりと落ちており、白いマントを使って体勢や落下路をうまく調節していた。

少女の降下予測地点である霹靂号^{へきれき}の甲板の中央付近は無人となり、海賊たちはそこを半円状に取り巻いて武器を構えて待機していた。

先頭にいるジェヴィアは、合図があるまで攻撃しないように命じている。すぐには攻撃せず、ギリギリまで様子を見ることにしたようだ。

〈封魔弓〉が効かなかったのだから、少女は比喩的な意味で——ひよっとすると文字通り——化け物だ。しかし、友好的な化け物という可能性もある。

念のため最後にもう一度、ジェヴィアが〈封魔弓〉を使用したのが、やはり少女の落下速度に変化はなかった。

接触の時は来る。

少女が遂に海賊船に降り立った。

綿^{わた}が落ちたかの如く、接地音は全く無い。攻撃してくる気配も無かった。

少女は細身で、身長はアルウインの言う通り12歳くらいの少女のものだ。

顔たちは、ハルシエの（というよりシオンの）基準では平均値だろうか。

肌はラントリス大陸系人種ほどではないが、日に焼けた海の男達に囲まれていると際立って見えるくらいには白く、毛先が肩に触れる長さの癖の無い黒髪と対照的だ。

着の身着のまま、荷物らしい物は持っていない。

膝まで届く、上質そうな生地でできた大きめの白いコートは、ポケットに詰め込まれているらしいたくさんのものでかさばっている。少し変わったデザインだが、明らかに寒冷地域向けとわかるそのコートは、ここ亜熱帯地域では見ているだけで暑苦しい。

前の開いたコートから覗く下は、丈の短い白のズボンだった。左右の腰の位置に何かのケースらしきものが付いており、同じ物が彼女の脛すねにも一つずつ巻き付けられている。

そんな中、一際シオンの目を引いた特徴があった。それは、彼女の瞳の色。

（青い瞳！？ まさか……）

シオンの脳裏に、1人の地球人少年の姿が浮かんた。

地球を探検し戻ってきた唯一のハルシェ人、ラミウス・カレムシルトの、現地で水先案内人、ライル。

元々姓の無かった彼は、ラミウスの養子となり、カレムシルト姓を与えられた。

約千年前の人間であるその魔術師は、この少女と同じ、青い瞳をもっていた。この少女は、ライル・カレムシルトの子孫なのだろうか。だとしたら、この世界の存在を知っていても不思議ではないだろう。

ところで、少女はさっきからずっと黙ってはいるわけではない。むしろその逆。口を一生懸命にパクパクと動かして「アー」やら「エー」やらと意味の無い音を発しており、言葉が伝わらないことに当惑していることが窺える表情を浮かべていた。

魔術師は、魂内に保有するマナを消費することで、魔術師の共通語、〈エティア語〉を使用できる。少女が今こうしてエティア語を使えずにいるのは、〈封魔弓〉によって魂内のマナを剥ぎ取られた確かな証拠だ。

その上、今、少女の体の周りでは、薄紫色の仄かな光が陽炎のように揺らぎながら発せられている。これは〈漏光〉と呼ばれる、魔

術師一人一人の魂に固有な色の“魔光”が本人の意思と無関係に漏れ出る現象で、やはり、魂内のマナが極度に減少したことを示している。

だが、マナが枯渇しているのなら何故、少女は今こうして無傷で自分たちの前にいるのか？ 浮遊術には魔術の使用が必要不可欠なのに。

間もなく、〈エティア語〉の使用に必要な最低限な量のマナを回復したらしい少女が話し始めた。

「ご挨拶が遅れて申し訳ありません。何故か〈エティア語〉が使えなかったもので……」

少女のメゾソプラノの声は優雅で愛らしく、口調は外見年齢不相応に大人びていて品があり、育ちの良さを窺わせた。だから、嫌味ともとれるその発言内容に顔をしかめるものは誰一人としていなかった。尤も、少女は〈封魔弓〉の存在を知らないので、嫌味でない可能性の方が高いが。

「初めまして、高貴なるハルシエの皆さん。私、わたくしリリア・フリース……と申します。地球アースからやって来ました。この船のおかげで溺れ死なずに済みました、ありがとうございます」

名前を言った後に少し不自然な間があったが、シオンの関心は別のところに向いた。

「アース？ ミダンヤードじゃないのか？」

シオンは思わず疑問を口にしてしまった。少女と海賊たちの視線がシオンに集まる。

（しまった……）

「ミダンヤード……ああ、ミッドンイエアルド、古英語ですね。そうですね、そこから来ました。今はアースという名前が一般的ですがミッドンイエアルドという呼称をご存じということは、あなた、もしかしてクレイティラムという国の方ですか？」

少女リリアが満面の笑みを浮かべてシオンに問いかけた。

シオンは心臓を抉られたような気分を味わった。

「いや、ミゼリエって国の人間だけだ」

動揺を表に出さずにシオンが答えると、リリアは目に見えて落胆した。

「そうですか……」

そう言うと、リリアはゆっくりと海賊船を見回し始めた。

まず、リリアは隣の船の奴隷たちに目を向けた。奴隷達は今まで戦々恐々として彼女を見ていたが、彼女と目が合うや否や、慌てて目をそらした。リリアは不快そうに思い切り顔をしかめて、大声で嫌悪の念を口にした。

「汚らしい奴隷の分際で、こちらを見ないでください！」

啞然とする海賊たち。

今の発言から、この少女は奴隷制社会で育ってきたのだとわかる。奴隷制を禁止しているクレイティラムで育ったシオンは、彼女に少し失望した。

しかめ面を消し去って無表情になったリリアが次に目を留めたのは、船舷に置かれた小舟だった。リリアの顔が一瞬綻ほころんだ。

それから霹靂号を眺め回したりリリアは、視線を海賊たちに戻すと、再び話し始めた。

「立派な船ですね。私、帆船って初めて見ました」

その言葉から、馬鹿にしたようなニュアンスをシオンは微かに感じ取った。

「ところで、一つお願いがあるのですが」

言葉を切ると、リリアは先程目を留めた小舟を指差した。

「あの小舟を私に売ってくれませんか？」

「何だと？」

ようやくジェヴィアが口を開いた。

「どうするつもりだ？」

「私、クレイティラムという国に行きたいんです。父がそこへ向かったはずですから」

「……すると、最初に来た地球人はお前の父親か？」

「はい。クレイティラムの、恐らくは首都デイルシアの上空に父の異界間の門が開いたはずですので、合流すべくそこへ向かうつもりです」

デイルシア。そこはシオンの故郷にして住所だ。懐かしい響きによって、シオンは郷愁にかられた。

それにしても、どうして彼女は自分の父親の行き先がわかるのか、シオンは疑問に思った。異界間の門の入口は南極北極上空に固定されているが、出口の場所は基本的にランダムだというのに。

リリアは話し続ける。

「この船がクレイティラム行きなら、船代ではなく船賃を払うところなのですが、進路が真逆みたいなので……。そこで、あの小舟を使いたいのです」

リリアは徐に、コートの内ポケットから何かを取り出し始めた。

海賊たちは一斉に警戒して剣を向けた。

だが、それに臆することなくリリアが取り出したのは、武器などではなく、コンパクトサイズの金の延べ棒だった。

海賊たちの目の色が変わった。

「純金です。これと交換してくださいませんか？」

本当に純金だとしたら、全く不釣り合いな交換だ。この少女は相当な金持ちでかつ相当な世間知らずなのだろうか。

「……その前に一つ聞かせてくれ」

ジェヴィアがまだ警戒を解かずに言った。

リリアはきょとんとした顔で、「何でしょうか？」と言った。

「君はどうやって浮遊術を使った？」

リリアは一瞬何を言われたのかわからないという風な表情を浮かべた。だがやがて、可笑しそうに微笑むと、すらすらと答え始めた。

「私の魔力じゃ浮遊術なんて到底無理ですよ。《発光》の魔術に苦勞する程なんですから。」

この惑星の重力が地球のと違うんです。重力がここよりずっと強

い地球で生まれ育ったので、私の体、皆さんより軽くできているんです。ほら、軽い物ほどゆっくり落ちるでしょう」

その説明によると、どうやら少女は本当に羽毛はふのように落ちていたようだ。

シオンを含め皆、その説明に納得した。いや、納得した気になったと言った方が適切だろう。

リリアの嘘に気付いた者は、誰一人としていなかった。この世界では未だに、ガリレイもピサの斜塔も存在したことがなかった。

とにかく、少女には特別な力なんて無いのだと海賊たちは確信した。そして、目の前には金の延べ棒。

海賊たちは戦闘態勢を解いた。今彼らの顔には、昼間トラキアル号を襲撃した時のような余裕が浮かんでいた。

この子には危機観念が欠けている、とシオンは思った。彼らの少女に対する恐怖は、すでに消えてしまっている。となると、彼らは本来の姿、悪逆非道な海賊に戻るだけだ。非力で裕福な少女相手に誠実な取引をしてやるような海賊がどこの世界にいるだろうか。

見知らぬ世界に来て、父親に逸れ、そして恐らくは身ぐるみ剥がされて奴隷として売られるであろう地球人リリア・フリースの運命を、シオンは心から哀れんだ。

「そうかそうか。つまり、君には我々の脅威となるほどの魔力はないと」

ジェヴィアは愉快そうに言った。〈封魔弓〉が効かなかったわけではないとわかって、安心したのだろう。

「ええ……そうですが」

リリアは無表情で答えた。自分の置かれた状況に気付いたのだろうか。その割には怯えた様子を見せない。

「よくわかったよ、世間知らずのお嬢さん。服や行儀作法は上等みたいだが、おつむはそうでもないみたいだな。まあ、未開人の子供ならこんなものか、ハハッ。

全く、天から金づるとはこのことだ。割と高値で売れるかもしれ

んし、ひよっとするとこいつの父親とやらから身代金をふんだくれるかもしれんぞ。ハネス、服を脱がせて向こうの船に移せ」

「アイアイ、サー」

「そんなっ！　お願いです、助けてください！　どうかご慈悲を……」

リリアは両手を組み合わせ、目を潤ませてすがるように言った。そんな彼女の必死の哀願を無視して、屈強な体つきの海賊がリリアに近づく。いや、近づこうとした。

「……おい、海賊」

一瞬シオンは誰が言ったのかわからなかった。それくらい、今のリリアの声のトーンはさっきまでのものと似ても似つかなかった。リリアの雰囲気も豹変していた。先程までが光なら、今は闇。彼女の眼に浮かぶのは、軽蔑と憎悪。そして殺意。

「それ以上近づいたら殺す」

か弱そうな少女のものとは思えないどすの利いた声に、全員が硬直した。だがそれは僅かな間のことだった。

沈黙を解いたのは、ジェヴィアの笑い声。

「ハハハッ。そんな虚仮威こせおどしが通用すると本気で思っているのか？　君は私の〈破魔矢〉を食らったのだから、あと四半シユピア（30分）は魔術が使えない。それとも、我々に白兵戦を挑もうというのかな？　だとしたら笑止千万だ。ハネス、気にせずさっさとやれ」

軽く頷いたハネスが、再び近づき始めた。

——それが、彼の運の尽きだった。

ジュツという、熱した鉄を水に浸けたような音がしたと思った直後、ハネスは倒れた。

彼の頭頂部には小さな穴が空いており、そこから血がじわじわと滲み出にじていた。

どう見ても、死んでいる。

「……」

沈黙。そして――

「馬鹿なっ!」

「よくもハネスを!」

「あのガキ何しやがった!?!」

海賊たちが口々に叫んだ。今彼らの心を支配しているのは、恐怖ではなく憎悪。家族同然の仲間を奪われたことに対する憤怒。

シオンはジェヴィア海賊団の団結力の強さを再認識した。スパイのシオンには彼らに対して仲間意識なんて無いが。

シオンは、心のどこかで彼女に期待し始めていた。もしかしたら、彼女はこの忌々しいスパイ任務を終わらせてくれるのではないかと。

シオンは、何事もなかったかのように佇んでいるリリアに目を向けた。彼女の顔に浮かぶ笑みは、さっきまでの愛らしいものと打って変わって残忍なものとなっており、彼女の薄紫色の“漏光”と相まって、とてつもなくおどろおどろしい雰囲気^{かも}を醸し出していた。

「愚かしい……。そんなんでよく私を未開人呼ばわりできたね、このごみども^{デブリ}が……。まあ大体想像はついてたけど。お前たちは魔……アー、エー、アウア?」

ジェヴィアがこの期^こに及んで再び「封魔弓」を使用した。僅かに自然回復したマナすらも剥ぎ取られ、リリアは再びコミュニケーション手段を封じられた。

「ウワ、マタダ、ドウナツテルンダヨモウ、イライラスルナア――」
シオンたちには理解不能な言語でリリアはブツブツ言い始めた。

その隙に、海賊の1人が腰につけた鞘から剣を抜いて、リリアに切り込もうとした。

だが、彼が進めたのは最初の一步だけだった。ハネスと同様に頭に穴を空けられて、甲板に倒れ込み、2つ目の血だまりをゆっくりと形成し始めた。

下手人は、自分の所業に興味が無いようで、考え込むような表情をしていた。

「——マナガコワサレテルノカナ、アンマリイミナイノニ」

「お前ら、魔術で総攻撃だ！ 《念道》であのガキを右舷に突き落とせ！」

ジェヴィアの号令で、全員が魔杖代わりまじように剣先をリリアに向け、呪文を唱えた。シオンは唱えるフリだけした。

「レディル エレスト！」

《念道》は、最も初歩的な魔術だ。だから、いくら魔術が苦手な者が多いとはいえ、ジェヴィア海賊団員は皆、ある程度の強度の《念道》を発動できる。

また、有魂生物、すなわち人間に直接魔術をかけるのは難しいが、大勢で同一の効果を持つ魔術をかけるので、リリアの（自己申告によると）かなり軽い体を突き飛ばすのには余裕で十分なはずだった。しかし、リリアの体は一瞬右舷の方に振れただけで、それ以上はビクとしなかった。

「アー、アー、あー……お？ よし、また喋れるようになった」

「お、お前、何者だ？」

ジェヴィアがどもりながら訊いた。

「……地球人だけど？」

「黙れ化け物っ！！」

「……。うーん、頭悪い奴と話してるとなんかイライラするな」

突如、先程リリアが指差した小舟が浮き上がり、霹靂号の外に放り出された。

小舟が勢いよく着水する音に動じなかったことから、今のはリリアの仕業だとわかる。

「《念道》？ 馬鹿な、何故お前が魔術を使える！？ こいつで確かにお前のマナを——」

「異能、だね？」

シオンがジェヴィアの言葉を遮って、恐る恐るリリアに訊いた。リリアはシオンを見てニコリとし、もはや最初とはすっかり変わってしまった口調で、得意げに話し始めた。

「正解。お前、このリーダーっぽい人よりは頭良さそうだね。

あたし、《念道》の特化型異能が使えるんだ。だから、お前たちがどうやってあたしのマナを壊してるのか知らないけど、《エティア語》が話せなくなるくらいしかこっちに被害はないんだよね。魔術はあんまり得意じゃないから、あたし」

特化型異能。マナを消費することも、呪文を詠唱することも無しに、特定の魔術を高いレベルで発動できる、特殊能力。

しかし――

「でも、それじゃあどうやって2人も殺したのかい？　いくら異能とはいえ、《念道》であんなふうに瞬殺するのは無理だと思うけど」

――《念道》は戦闘ではなく日常生活での使用に向いている魔術だ。魔術は有魂物質⇨人間に対しては非常に効果を発揮しにくいいため、攻撃に使うとしたら、何か固くて重い物を投げつけるという戦法くらいしかとれない。つまり、《念道》であんな風に瞬殺することは不可能なはずだ。

「うん、無理だよ。《念道》だけならね」

リリアはまた可笑しそうに笑うと、空を見上げた。

シオンもつられて見上げると、夜闇の中から2つの物体が落ちてきた。黒と白の大きなトロリーバッグだった。白い方には、立派な鞘付きの長剣が紐で括りつけられている。

2つのトロリーバッグは、リリアの足下に向かうと思いきや、海に放り出された小舟の中に静かに落ちた。

（今までずっと空に浮かべていたのか!?!）

見たこともない作りの鞆かばんや、少女の細腕では支えることなど到底無理に見える長剣よりも、シオンはそのことに驚いた。さすがは特化型異能。この子の《念道》は相当なものだ。

トロリーバッグにかけられていた《念道》が解かれると同時に、リリアはコートで隠れて見えなかった、腰の左右に固定されたホルダーから、1つずつ、計2つの何かを手で取り出した。

それはシオンが見たこともない物だった。何となく武器のような

気がする。2つは全く同じ物で、白を基調として作られており、それぞれ同じ部分が緑色に淡く光っていた。どこことなく、弓部分の無いクロスボウを短くしたものに似ている。銃という武器を見たことのないシオンは、そう思った。

リリアは2つのそれを両手に持ったまま、夜空を見上げた。

「これと同じ物が2つ、上にも浮いてる」

リリアの言う通り、帆柱の先よりも高いところに2つ、船の灯火を反射して白く微かに光る物体が浮いていた。

（4物体同時制御！？）

トロリーバッグ2つに、謎の武器2つ、計4つの物体に《念道》をかけていた状態で、リリアは平然と会話していたことになる。

これでシオンは確信した。少なくともこの時代、彼女に匹敵するレベルの《念道》を使える人間はいない。

だが、所詮は《念道》、魔術の初歩の初歩。それだけで一瞬で人間を葬り去るのは普通なら不可能だ。

実際、リリアはこの能力を、戦闘の補助としてしか使っていないかった。

「そしていつでも——」

リリアは左手で握ったそれを、さっきまで小舟があった所の隣にある、果物が詰められた樽に向け、引き金を引いた。

樽に穴が空いた。そこから微かに白煙が出ていた。

「——こうできる」

海賊たちは息を飲んだ。本能が、彼女を敵に回すべきでないと告げていた。

それでも戦意を喪失しないのは、海賊の気質故か。しかし、か弱そうなこの少女が一筋縄ではいかない相手だという見解の一致には至ったようだ。僅かに後ずさりしている。

計4つあるトリリアが言ったあの武器が、魔導具であるはずはない。エネルギー供給源たるリリアは、〈封魔弓〉によってマナを剥ぎ取られているのだから。しかし、それならどうやってあんなに手

際よく殺傷できるのか、武器に詳しいシオンにも想像がつかなかった。ただ一つ言えるのは、非魔術兵器を用いる彼女が、今まで魔術を封じることアドバンテージを得てきたジェヴィア海賊団にとって天敵だということだ。

リリアは得意げな笑みを浮かべて言葉を続ける。

「非魔術攻撃。銃と同じだよ。出るのはレーザーだけど。」

……ごめん。剣なんて古代兵器を振り回してるような野蛮人のお前たちには、銃が何かすらわからないよね」

リリアは思わず、といった感じでくすりと笑った。

「よし、退路は確保したことだし——」

さつき海に放り出した小舟のことだろう。繋ぎ止めるロープも無いのに、風に押されて進む霹靂号に付いて来ている。リリアが《念道》を使っているとは思えない。

「——いい機会だから、お前たちの海賊ごっこに付き合っただけよ。後々のために、この世界であたしがどこまで戦えるか試したいと思ってたんだ。あたしと戦いたくない人は、その場に座って。立ったままのアホは、どうなっても知らないから。あたしが勝ったらこの船でクレイティラムに連れて行ってね」

シオンは躊躇せず、数歩下がって甲板に座り込んだ。それを見て、シオンの隣にいた、同期の海賊見習いアールス——14歳でジェヴィア海賊団最年少の彼は、シオンを兄貴と呼んで慕っていた——もシオンの横に座った。彼は今にも泣きそうな顔をしている。どうしてこいつは海賊になろうと思ったのかと、シオンは今まで何度も疑問に思っていた。

一方ジェヴィアとその手下たちは、度重なるリリアの嘲りに、とうとう堪忍袋の緒が切れた。

「総員、攻撃開始だっ！ このクソガキをファリンの餌にしてやれっ！」

ジェヴィアの号令を合図に、海賊達は一斉に雄叫びを上げながら——そうすることで恐怖心を追いやっているようにシオンには見え

た——真夜中の訪問者リリア・フリースに襲いかかった。

「ファリンって何だよ……」

という彼女の呟きを、シオンは辛うじて聞き取った。

「この臆病者があつ！」

シオンの側にいた古参海賊の1人が、何を思ったか突然シオンとアルースに切りかかってきた。ひいっと情けない声を上げるアルースを尻目に、シオンは慌てて自分の剣で応戦しようとした。

だが、その必要はなかった。シオンの目の前で、血迷った先輩海賊は宙に浮かぶ謎の兵器からの見えない殺人光線によって葬り去られた。

すでに、シオンの周囲には新たな死体がいくつか疎らに転がっている。シオンは、今や一番死骸の密度が高くなっている、リリアが立っていた場所に視線を戻した。

そこにリリアの姿はなく、代わりにジェヴィアが立っていた。

（やられた！？ いや、違う……）

ジェヴィアを含めまだ生きている者——最初の70%近くまで減っている——は皆、上を向いていた。彼らの視線を辿った先、帆桁（帆柱の横木）の上に、彼女はいた。体が軽いから、あのくらいの高さ、楽々と跳べるのだろう、きつと。バランス感覚が優れているのか、危なげなく立って、甲板を見下ろしていた。

不意に、まだ見張り櫓にいたアルウィンが飛び出し、帆桁の上を走ってリリアに切りかかった。だが、リリアの右手に握られた武器の口が向けられるや否や、脳を焼かれ、制御を失った肉体は帆桁からの墜落を始めた。

リリアの攻撃は続く。帆桁と同じ高さまで降りてきて、自由自在に飛び回る2つ。リリアの両手に握られた、もう2つ。計4つの謎の武器がその口を向ける度に、狙い違わず海の男たちの脳を融かし^とていった。敵はリリアただ1人なのに、彼らは3方向からの攻撃を

警戒しなければならない。人間の目も脳も、そんな状況に対応できるようにはできていない。

リリアがいちいち攻撃対象に目を向けている様子はなかった。まるで、視覚に頼らずとも全員の位置を把握している可能ような手際の良さだった。

《遮蔽》の魔術を使える者が1人でもいれば、戦況は変わったかもしれない。だが、そんな高級魔術を使えるくらいなら、海賊、それも非魔術戦闘特化のジェヴィア海賊団に所属しているはずがなかった。

完全に手も足もでない状況。なのに、誰も降参しようとはしない。わかっているのだ。ここで降参したとして、彼女の望む行き先に着けば、どのみち死ぬことになる。クレイティラムでは、海賊行為は即、死罪だ。

今、彼女は最高に満足げな表情を浮かべていた。あの顔にシオンは覚えがあった。自分が思っていた以上の力を発揮できたときの顔。彼女は初め、ここまで圧倒できるとは思っていなかったのだろうか。

あまりにも一方的な戦いは、始まってからまだ60ルム(≒30秒)も経っていないはずだ。いつの間にかこちらはまだ10人も残っていないのに対して、リリアの方は無傷だ。服に血の染み一つ無い。

シオンは甲板に転がるジェヴィアの姿を見つけた。死んでいる？シオンならば困難を極めたであろうナイゼル・ジェヴィアの殺害が、こうも呆気なく完了してしまうとは。シオンは驚き呆れた。接近非魔術戦闘なら負け知らずの彼も、非魔術遠隔攻撃をしてくるリリアの前には、ただの的の1つでしかなかったということか。

リリアを除けば、立っている者はあと3人。いずれもジェヴィア海賊団の古参で、殺人光線を避けるべく不規則に甲板を駆け回りながら、時折リリアに短刀や短剣ナイフを投ダガーげている。だが、それらはリリ

アの《念道》で悉く軌道を逸らされ、彼女のところまで届くことはない。彼らの表情には恐怖と絶望が見え隠れしていた。

彼らが生を諦めかけた、そんな時だった。不意に、4カ所からの攻撃が順々に止んでいった。騙し討ちを警戒しながら彼らが見上げると、4つの超兵器から微かに発せられていた緑色の光が消えており、それらの操縦者であるリリアの表情には、少し焦燥が浮かんでいた。

（燃料切れ！？）

3人の手練たちも、シオンと同意見のようだった。そのうちの1人が、牙を失った非力な少女の息の根を止めるべく、帆柱の梯子を登ろうとした。

シオンはどうすべきか迷った。恐らくあの3人はリリアを殺すことができないだろう。さっき言っていたように、リリアはすでに退路を確保している。見えない力によってこの船の横で並行している小舟にジャンプすれば、あとは小舟に《念道》をかけて逃げるだけだ。

だが、異能といえど長時間使用には精神的・霊魂的に限界があるはずだ。彼女に限界が訪れた時に、運悪く嵐にでも遭ったら……

シオンは自分が、過酷な任務を終了させてくれたリリアをいつの間にか味方と認識していることに気づいた。

（魔術が使える今なら……やれる！）

「アルース、そこを動くなよ」

弟分に小声で命令すると、シオンは音もなく立ち上がった。

シオンの予想通り、リリアが逃げるべく帆桁から跳び立とうと足を曲げた。だがその足が帆桁から離れるより先に、シオンは帆柱に登りかけている海賊に向かって短刀を投げつけた。

シオンはリリアの視界外にいたし、投擲も無音で、魔術もまだ使っていないかったのに、短刀がシオンの手から離れるや否や、リリアが勢いよく振り返って、驚いた表情でシオンを見た。シオンは確信した。彼女は6感（視覚・聴覚・嗅覚・味覚・皮膚感覚・魔覚）以

外の外感覚を持っている。彼女は2つ目の異能を持っているのだろうか。

（勘違いしないでくれよ。軌道を逸らされたら、奇襲の意味がなくなる）

シオンの願いが叶ったのか、リリアはその短刀が自分に向けられたものではないと瞬時に判断し……不思議そうにシオンを見つめた。短刀が海賊の背面左上部、心臓の位置に命中し、貫通する。この見事な結果は、決してシオンが短刀投げの達人だからではなく、心中で呪文詠唱した《念道》による軌道修正と加速によるものだ。

リリアにしか注意が向いていなかった残り2人の海賊は、すぐには“海賊見習いアレン”の裏切りに気づかなかった。そのために、1人目と同様にして2人目の海賊が、シオンの投げた短剣に心臓を貫かれて絶命した。

3人目がシオンの裏切りに気づく。だがその時には、すでにシオンが剣で切りかかって来ていた。

ギリギリのところでは海賊は自分の剣で防御した。白刃がぶつかり合う金属音が夜の海に響く。

「あ、アレン、どういふつもりだっ!？」

「……僕の名前はアレンじゃない。シオンだ」

剣技は互角。腕力は海賊の方が上。いくら海賊がリリアの攻撃を避けるために体力を消耗したとはいえ、もし〈封魔弓〉によって魔術が封じられていれば、勝負の行方はわからなかっただろう。

だが、今は魔術が使える。魔術が使える状況での1対1戦闘で、クレイティラムのデイルシア王立魔術学院を飛び級で卒業した鬼才児シオン・アーミラーが、海賊ごときに遅れをとることなどありえなかった。

「カペル エリ デュ ルーカ ヴェルネセイ」

《麻痺》の呪文を発声詠唱。

魔術戦闘に不慣れな海賊は、シオンの魔術に一切の抵抗を見せることなく、動きを封じられる。

無防備になったその体に、シオンの剣が襲いかかり、首を切断した。

「ふう……」

シオンが止めていた息を吐き出したのとほぼ同時に、吹き飛んでいた3人目の海賊の首が落下し、シオンの足下に転がった。

（終わったか……）

これで、敵はいなくなった。

——そう考えるのは早計だった。

03 胸の傷痕

【クレイティラム 首都デイルシア】

王宮の広大な庭の一角に、クレイティラム連合王国の歴代国王が眠る、王家の墓地がある。

この場所は、いつもは静謐せいひつに包まれている。基本的に人が多く集まる場所ではない。真夜中とあらばなおさらだ。

だが今宵、そこは史上稀に見る騒がしさだった。

「どいてくれ」

王国軍元帥、エルディ・アーミラーは、近衛兵と王宮警備兵たちで構成された群れに近づいた。

「元帥殿！」

エルディの存在に気付くや否や、兵士たちはさっと道を空けた。

そしてエルディは、初代国王ラミウス・カレムシルト・クレイティラムの墓石の前で死んだように眠る、赤毛の青年の姿を見つけた。彼は空から落ちてきたらしい。〈天の息吹〉とその方角から考えて、彼は地球人だろう。

彼の体にも、地面にも、落下の衝撃の痕跡は見当たらない。王宮の私室で寝ていたエルディを起こしに來た警備兵によると、彼は「羽毛のようにゆっくりと落ちてきた」そうだ。

だがそんなことは、彼の正体と比べたら些事ではなかった。

「……馬鹿な。そんなことが……」

エルディは自分の目を疑いながらも、ゆっくりと青年に近づいた。呼吸はしている。だが、“ソウエル”（魔源）の独特の揺らぎが、生気が感じられない。

「呪いがかけられていますね。生きてはいないが死んでもいない、と言ったところでしょうか」

エルデイの背後から、飄々（ひょうひょう）とした男の声が聞こえてきた。

「ヘミアンか」

エルデイが振り向いた先には、どんな時でも消えることのない笑みを浮かべた、この国の宰相ウィリリー・ヘミアンがいた。

「その青年をどう考えますか、アーミラー元帥？」

「普通ならありえない。だが……」

エルデイは青年の傍にしゃがみ、その^{まぶた}瞼を開かせた。

「青い瞳、赤い髪、そしてこの顔つき。千年前にラミウス・カレムシルトが《念写》で描いたあの絵の少年と瓜二つだ。子孫などであるはずがない。彼はライル・カレムシルト本人で間違いないだろう」
「自分も同意見です」

ライル・カレムシルト。初代国王ラミウスの友にして、弟子。そして、養子とはいえ、彼の唯一の息子。

彼なら当然、この世界の存在を知っている。^{レシュティア}異界間の門の使い方もラミウスから聞いているはずだ。

だが、彼が“今”この世界に現れることなど、絶対にあり得ないはずなのだ。ハルシェの魔術の歴史が、それを物語っている。

——不老不死の魔術は存在しない。

彼が本当にライル・カレムシルトだとしたら——彼は青年などではない。1000歳の大老人だ。

★☆☆★

【テレイジア洋 霹靂号】

「助かったよ、ハルシェ人」

シオンが少し乱れた呼吸を整えている時、甲板の離れた所に降り

立ったりリリアが、シオンを警戒しながら言った。

はだけたコートの前部分から、両腰にかけた2つと、両太股に巻いた2つ、計4つのホルダーが覗いており、それらに例の超兵器が収まっているのが見えた。

「でも何で？ お前、こいつらの仲間じゃないの？」

リリアは足を僅かに曲げており、シオンが襲いかかってもすぐに逃げられる体勢をとっていた。

シオンは友好的に見えるように笑みを浮かべて答えた。

「違う。僕はこいつらの仲間じゃないし、君の敵でもない」

シオンはリリアに近づこうとした。だが、リリアの「来るなっ！」という怒鳴り声で、やむなく停止した。

「じゃあお前は何者？」

「……信じてもらえるかどうか知らないけど、僕はスパイだ。この海賊団に潜入していた。君が推測した通り、僕はクレイティラムの人間だよ。」

挨拶がまだだったね。初めまして、ハルシェにようこそ、リリア。僕はクレイティラム連合王国軍特務隊所属、シオン・アーミラー」

そう言うと、シオンは頭を軽く下げ、自身のピンク色の魔光を發した。頭を下げるのはクレイティラム式だが、挨拶時に魂の色である魔光を發する慣習はハルシェ共通のものだ。

それを見たリリアは、少し戸惑った表情を浮かべながら、軽く頭を下げた。魔光は發せられなかった。

「……こちらこそ、よろしく」

口調や表情からはまだ少し疑惑の念が感じられたが、シオンに対する警戒は少し緩んだような気がする。

（様子見ってところか……）

「シオン・アーミラー、一つ聞きたいんだけど。クレイティラムに奴隷制は？」

「ないよ、当然。あとシオンでいいから」

「……あっそう。じゃあシオン、あの人たちの枷を外してあげて」

「……え？」

シオンは耳を疑った。確かリリアは、「汚らしい奴隷」とかなんとか言っていたような。

「えーと……君の国には奴隷制って無いの？」

「は？ 無いに決まってるじゃん、そんな野蛮な慣習。もう地球のどこにも無いよ。馬鹿にしないでもらいたいね」

「……じゃあさっきのあの発言は？」

「『汚らしい』云々のこと？ ああ言うておけば、あの人達が人質に取られることもないでしょ。まあ、どっちみち人質を取る暇はなかったと思うけど」

リリアはトラキアル号の甲板の、奴隷達が集まっている帆柱付近から少し離れたところを指差した。そこには2人分、頭をくり貫かれた死体が転がっていた。奴隷監視のためトラキアル号に残された海賊と見習いの2人だ。

この少女、相当切れる。一体何歳なのだろう？ 外見は12歳くらいだが、外見通りの年齢とは思えなかった。少なくともアルースよりは年上だろう。

後で聞いてみることにして、シオンはとりあえず、リリアに言われた通り、奴隷となった人々を解放することにした。

「兄貴、スパイだったの……？」

シオンとリリアは思い出したように、少しの間その存在を忘れられていたアルースの方を見た。彼は今、座っていると言うよりは腰を抜かしているという表現の方がぴったりな体勢だった。

「こいつ、お前……あんたの弟？ 全然似てないけど」

シオンは“お前”から“あんた”に昇格(?)したようだ。

「いや、僕の弟分だよ。海賊見習いとしてのね」

シオンは真剣な顔つきで、アルースのそばにしゃがみ込んだ。

「アルース。この船は今からデイルシアに向かう。着いたらお前は逮捕されるだろう。でも、寝返って僕のスパイ任務に協力してくれ

たということにすれば、たぶん死刑は免れる。そうしてほしければ、お前も手伝え」

「それ職権乱用ってやつじゃないの？」

リリアが避難するような目つきで言った。

「見逃してくれないかな、リリア？ こいつはまだ誰も殺してないんだ。君には投降したわけだし。それに、全くお咎め無しにするつもりはないよ。海賊見習いに志願したのはこいつの意志だからね。ただ、死刑は気の毒だろう？」

「……ご勝手に。降参した以上、そいつは私の敵じゃないし」

「あ、ああありがとうございますっ！」

アルースは勢いよく平伏した。

「……土下座？」

リリアが何か言ったが、シオンは聞き取れなかった。

アルースが立ち上がるのを待ってから、シオンは辺りを見回した。

「さてと、鍵は……」

持っているとしたら、トラキアル号に残った海賊だろう。

シオンは霹靂号の左舷に向かい、トラキアル号に跳び移るべく、

《風》の魔術を発動させようとした。

「あのリーダーっぽい奴が持ってるんじゃないの？」

だが、そう言ってリリアがジェヴィアの死体のもとへ歩み寄るのを視界の隅で捉えて、シオンは何かとてつもなく嫌な予感がした。

まさかと思いつながら、シオンが振り返ると――

「アアアッ！！」

――そこには、短剣で左肩口を貫かれ、悲鳴を上げるリリアと、頭から血を流しながら、狂気じみた笑みを浮かべてリリアにつきみかかるナイゼル・ジェヴィアの姿があった。

「やめろっ、ジェヴィア！」

怒鳴りながら、シオンは死んだと思っていた海賊の首領に向かって血だらけの甲板を駆けつけた。

シオンの声に驚いたジェヴィアは、自分の血で赤く染まった目をシオンに向ける。その隙について、リリアは凄まじい勢いで水平に吹き飛び、ジェヴィアの手から逃れた。左肩口にはまだ短剣が刺さったままだ。

（今のは何だ！？）

あんな動き、普通の人間なら真似できない。もうこの地球人少女がやることなすことに一々驚くなどということなのか。だが今はあれこれ考えている暇はない。

リリアに逃げられたジェヴィアは、怒り狂ってシオンに突進してきた。両手に2振りの刀を持って。

ジェヴィアの刀とシオンの剣がぶつかり合う。ここまではシオンの計算通り。先程と同様に、《麻痺》の呪文を唱え始める。

だが突如、シオンは周囲の空間からソウエルの揺らぎが消えるのを感じ取った。

（くそっ、〈封魔弓〉が使われた……）

魔術は、魔術師が“世界Ⅱ神”に特定の現象の発生を依頼することで発動する。ゆえに、魔法現象を起こしているのは世界であって、魔術師はただの依頼人にすぎない。

マナ（魔素）とは、いわば“便箋”^{びんせん}で、呪文という形で依頼内容が書き込まれる。この例でいくと、ソウエル（魔源）は“配達人”で、その“依頼書”を神の元に届ける媒体の役目を担っている。

〈封魔弓〉の使用例を、シオンは2つ知っている。

1つは、リリアが散々やられた“マナの破壊”。これは見えない矢を放つことで発動する。

もう1つは、“ソウエルの固定化”。これには何の動作もいらない。

今使われたのは後者で、“配達人”の動きを封じられたことになる。

ジェヴィアが頭から出血している今なら、身体能力はシオンが上だろう。だが、白兵戦で一番物を言うのは、経験とそれによって培

われたセンス。

ジェヴィアが不意に、2本の刀の一方をシオンの剣から離し、左から水平に切りかかった。

慌ててシオンも剣を離し、そのまま左に立てながら後退した。だがジェヴィアは、シオンとの間合いを全く広げることなく追撃してくる。

1合、2合、3合……。ジェヴィアは獣のように唸りながら、しのかし的確に、双刀を巧みに操って攻撃を浴びせてくる。対してシオンは防戦一方だった。徐々に船べりに追いつめられていく。

「なっ!？」

シオンは何かに躓いた。恐らくは死体だろう。

バランスを崩した隙を狙って、ジェヴィアは後ろに引いていた一方の刀で横殴りに切りかかった。

シオンは剣を立てて辛うじて防いだが、勢いに負け、剣を手放してしまった。支えを失った剣は、回転しながら船外の闇の中に飛び出した。魔術が封じられている今は、《念動》で呼び戻すこともできない。

次の攻撃が迫る。シオンは自らの死を確信した。

「グアアアッ!」

突然ジェヴィアが苦痛に満ちた表情で叫んだ。

彼が体をひねったおかげで、シオンは彼の背中に2本の短剣が突き刺さっているのが見えた。一方はちょうど心臓の位置だ。

シオンは、ジェヴィアの後方の離れた所に、苦痛で顔を歪ませながらこちらを向いて座り込んでいるリリアの姿を見つけた。アルースは何故か彼女の傍で倒れていた。

短剣を飛ばしたのは彼女の《念動》だろう。ありがたい。だが……浅い。きつと心臓まで届いていない。

(今しかチャンスはない……一か八かっ!)

もう武器を持っていないシオンは、恐怖を押し殺して全速力でジェヴィアの懷に潜り込んだ。

まだ激痛のショックから立ち直っていないジェヴィアの左脇下に右手を通し、まだ刺さったままの短剣の柄を掴むと、貫通してシオン自身の体を傷つけないように気をつけながら、思い切り手前に引いた。

「終わりだ、ジェヴィア」

ジェヴィアの荒い鼻息が、聞こえなくなった。

彼の両手から、2振りの刀が滑り落ちた。

彼の顔から、苦悶の表情が消えた。

シオンは、短剣をジェヴィアの体から抜いた。

激しく吹き出た鮮血が、甲板をさらに赤く染めた

——海の覇者は、遂に息絶えた。

「リリア、本当に助かった。ありがとう」

シオンは急いでリリアの元に駆けつけた。彼女の白いコートは肩口のあたりが真っ赤に染まっていた。一刻も早く止血し、治療しなければ。

今回は「来るなっ!」と怒鳴られることはなかった。そんな余裕が無かっただけかもしれないが。

「ううう……ちょっとやばいかも……くらくらしてきた……」

僅かに鼻声になっているリリアの声。弱々しく、さっきまでの威勢は吹き飛んでいた。

「すぐに《治癒》の魔術をかけるから。気をしっかり持って」

まずは、短剣が刺さっているこの服を脱がせないで。

短剣を動かさないように気をつけながら、シオンは途中で拾った短剣で慎重に彼女のコートを切り裂こうとした。だが、コートはなかなか裂けない。

(なんて頑丈な繊維だ……仕方ない)

「リリア、今からこの短剣を抜く。歯を食いしばって。1、2、3、4!」

「ガアアッ! ウウウ……何で4……?」

短剣の刺さっていた痕から血が溢れ出す——ことはなかった。少し滲み出るだけだ。

（どうなってるんだ？ 地球人は低血圧なのか？）

急いでコートを脱がせると、驚くことに中は半袖のブラウスだった。なんてちぐはぐな服装なのだろう。これが地球人のファッションなのだろうか？

この時、彼女の左腕に入れ墨が彫られているのに気づいたが、今はそれどころではないのでシオンは気にしないことにした。

ブラウスは容易に破くことができた。血で赤く染まった地肌が露わになる。

（カペル ラド ツェフィリム）

シオンはリリアの傷口に手をかざすと、心の中で《治癒》の魔術の呪文を詠唱した。

《治癒》は、人体の回復力を高めるだけだ。術士が凡人なら大した効果は見込めない。だが強大な魔力を持つシオンの《治癒》なら、神経や血管を繋ぎ合わせられるまで回復力を高めるのは難しいが不可能ではない。

「ふう……。ねえ、あいつの体どうなってるの!？」

少し痛みが退いてきた様子のリリアが、ジェヴィアの死体の方に目をやって言った。

「え?」

「あいつ、頭にレーザーが当たってたのに死んでなかったし、あんたと戦ってる時に一回頭にナイフを投げたけど、刺さらない上に無反応。頭皮の下に鉄板でも入ってるんじゃない?」

「……後で確かめてみよう。それより、こいつに何があった?」

シオンはすぐ傍で倒れているアルースを指差した。

リリアはアルースを一瞥すると、ふんつと鼻を鳴らした。

「こいつ、さっきあたしを殺そうとした」

「何だって!？」

集中力が削がれたせいで、《治癒》の効きが弱まってしまった。

シオンは慌てて無声詠唱し直す。

「あの鉄頭とあんたが戦い始めたら、すぐに、迷わずね。スタンガンで何とか倒したけど」

傍に落ちていた黒い長方形の物体が浮かび上がった。短い方の一辺に2本の金属の突起がある。また新たな武器だろうか。これもシオンは見たことがない。

「たぶん死んでないから、とどめ、刺しておいてくれる？」

「そんな……何かの間違いだろう？ 臆病なアルースがそんなこと——」

不意打ちなんて、シオンの知るアルースなら思いもよらないことだ。

「あたしも初めはただの腰抜けかと思ってたけど、違うね。こいつ、ずっとタイミングを見計らってたんだ。

で、どうするの？ あんたがやらないんなら、あたしがやるよ」

リリアの目が、シオンの足下にある今抜いたばかりの短剣に向いた。瞬時にそれは浮かび上がって、風を切りながらアルースの近くまで移動し——

「待てっ！」

シオンではない。確かにシオンは同じ台詞を口にしようとしていたが、先を越された——アルースに。

短剣が、アルースの首に触れるか触れないかの位置で止まった。

「やっぱり意識があったか。なのに今まで気を失ったフリをした。どうせまた隙を窺ってたんだよね」

「アルース……？」

やはり集中力は続かず、《治癒》の魔術はまた切れていたが、今のシオンはそれどころではなかった。

「……ったく、侮れねえな、異世界人。まあ俺も、この期に及んでまだ騙し通せるとは思ってなかったけどな」

横向きに倒れたまま、身動き一つせずにアルースは喋りだした。

何故か滑舌がひどく悪いが、その口調は、臆病さなど微塵も感じら

れないほど狡猾なものだった。

「どこまでもお人好しな馬鹿1人なら、何とか誤魔化せたかもしれないが……」

「どうということなんだ、アルース？」

アルースは首元の短剣を気にしながらも、ククツと笑った。

「やっぱり全然気づいていなかったか。俺はなあ、お前ら見習いどもをスパイしてたんだよ。伯父貴の命令でな」

「伯父貴？」

「俺には実はちゃんと姓があるんだ。ジェヴィアっていう」

「……お前まさか、ナイゼル・ジェヴィアの甥か？」

「ああ、そうさ。にしてもお前、スパイとしてはまずまずだな。他の連中は少しも気づいていなかったが、初めっから疑って見てれば、胡散臭いのなんのって。お前の他にもう1人、レインも怪しかったから、お前ら2人をまとめてスパイしてたんだが……もしかしたらあいつは他の国のスパイだったのかもな。その異世界人が殺しちゃったからもうわかんねえが」

シオンは愕然とした。スパイがスパイされていたなんて、笑い話にもならない。

（だから言っただろう、隊長。僕にスパイなんて向いてないって……）

シオンは心の中で、水平線の向こうにいる直属の上司に愚痴った。
「あのさあ、誰が誰をスパイしてしようが、あたしには関係ないんだよ」

リリアが左肩口を右手で押さえながら言った。アルースを見下ろす彼女の目には、大量殺戮時の冷たさが戻っていた。

「あんたはあたしを殺そうとした。だからあたしはあんたを殺す」

「だから待ってって言ってるだろ！ おい兄貴……じゃなかった、アレ……いや、これも違ったな、シオン、司法取引を要求する。お前が知らない奴隷や略奪品の流通先を全て教えてやるよ」

「……それで罰を免れようということか。でも何でお前がそんなこ

とを知っている。ジェヴィアに聞いたのか？」

「それもあるが、何より売りさばくのは俺の親父の役目だしな」

「……自分の父親を売るつもりか？」

「結局一番大事なのは自分の命だろう？ 親父と伯父貴はそう教えてくれた。俺はその教えを実践するだけだ」

「シオン、このガキもう駄目だ、性根が腐ってる」

「俺よりチビな奴にガキ呼ばわりされたくないね。で、どうするんだシオン？」

「……僕にそれを決める権限はない。だから、その権限を持つ人の所まで送り届ける。いいかな、リリア？」

アルースは満足げに笑みを浮かべ、リリアは舌打ちした。

「……ご勝手に」

シオンは頷くと、アルースの首元の短剣を握り、いつでも殺せる位置に構えながら、アルースを掴み上げた。

「牢には入ってもらうぞ。……おい、自分で立てって」

「そう言われてもねえ、そこのチビのせいで体に力が入らないんだよ」

「リリア、こいつの言ってることは……？」

「本当だよ。感電してる。耳障りなほど滑舌が悪いのもそのせい。まあでも、一応用心しといて」

「ああ、わかったよ」

シオンはアルースを片手で抱えながら、船べりの階段を下って行った。

彼女とは打ち解けたのだろうか。アルースを牢に入れながら、シオンはそう思った。

シオンが殺されそうになった時、リリアは助けてくれた。いや、あれはただ単に、ジェヴィアを始末したかっただけだろうか？ ひよっとすると、その前にシオンが助けてあげたことに、恩義なんて

少しも感じていないのかもしれない。だが……。

(さっき、僕を全く警戒してなかった……)

激痛のせいでそんな余裕がなかったのか、それとも――。

「おいおい、足枷までつけるのかよ」

「……お前は油断ならないからな。念には念を入れて、だ」

足枷に鍵をかけ、牢から出て扉状の鉄格子にも鍵をかけると、シオンは踵かかを返して、リリアの傷口に巻く包帯を取りに医務室へ向かうとした。

だが、思い出したように数歩歩いたところで止まり、背を向けたままアルースに話しかけた。

「そういえばお前、ずっと前に、僕みたいな兄貴が欲しかったって言ってたよな。……あれも嘘なのか？」

「……当たり前だろ」

「……そうか」

シオンは今度こそ、牢獄室から立ち去った。

「リリア、もうそんなに痛くないだろうから、上を脱いでくれるか？ 包帯を巻きたい」

《治癒》の魔術を発動させながら、シオンは言った。

リリアのブラウスは、これ以上切り裂けば修繕が難しくなる。それに、脱いでくれた方が断然包帯を巻きやすい。言うまでも無いが、シオンに下心は全く無かった。下心の対象では無かったと言った方がいいだろう。

「え……あ……うん……」

リリアは少し躊躇っていた。初めシオンは、それが乙女の恥じらいというやつなのだと思った。年齢的にも(12歳前後で間違っていないはずだ)、異性の目が気になって当然だ。……だが、その割には赤面していない。

リリアがゆっくりと、無表情で、ブラウスと肌着をまとめて脱い

だ。

そして露わになる、2つの傷痕。

「り、リリア、その傷は……!？」

胸部中央の左寄り、心臓の位置に、醜い傷痕があった。ジェヴィアにやられたものとは別の、シオンが知らない傷痕が。

まだ生々しいが、一応は塞がっている。彼女がこの世界に来てからできたものでは無い。

シオンはリリアの背中を見た。……やはり、貫通している。

(心臓を貫かれている……? でも、それなら……)

シオンはジェヴィアの亡骸に目を向けた。もはやそこから生氣は感じられない。それが当然だ。

心臓を貫かれたら、《治癒》の魔術はもはや用をなさない。即死だ。

つまり、目の前の少女がこうしてまだ息をしているのは、あり得ないことなのだ。

仮にあり得たとして……彼女は、少なくとも一度、生死の境をさまよったことになる。それが事故によるものなのか、あるいは……。

「早く……包帯巻いてくれるかな」

リリアはシオンと目を合わせないように横を向き、ひどく虚ろな表情をしていた。

何も訊かないで欲しい、という彼女の心の声が聞こえてくるようだった。

(一体……地球で何があったんだ?)

04 オーパーツ

隣の船、トラキアル号で、シオンが解放された元奴隷の大人たちと、今後のことについて話している。その光景をリリアは霹靂号から眺めていた。

今リリアは、トロリーバッグ——つい先程、海に放り出していた小舟ごと回収した——に入っていたTシャツを、さっきまで着ていた袖無しの肌着の上に着ている。今は丁度いいが、日が昇ったら肌着は脱ぐことになるだろう。

（東の風、貿易風……おまけにこの暖かさ……亜熱帯か。重力はたぶん地球と同じ。大気の組成も……苦しくないから酸素約20%。耳がちよつと痛いのは空から落ちてきたばかりだからだろうけど……。異世界と言うより、地球の並行世界パラレルワールドだな）

リリアは星空を見上げた。全く見たことのない配列。きっと、リリアの知らないハルシェ固有の生物や道具に因んだ星座が組まれているのだろう。

地球の星座が懐かしく、恋しくなった。

「やあ」

男が鎖を伝ってこちらの船に乗り込んできた。

彼の接近は鎖を伝い始めた時点で気づいていたが、声をかけられるとは思っていなかった。ハルシェ人というのは社交的なのか、あるいは自分が無愛想なのか。

「……なんですか？」

リリアは腰のホルダーからレーザー銃を取り出した。ここでは誰も信用できない。——誰も？

「おおっと、それ向けないでくれ。礼が言いたいただけだ」

近づいてきて初めて、男の髪の色が目に入った。なんと、群青色ぐんじょうだ！

「……礼？」

「ああ。本当にありがとう。みんな君に感謝してる」

「……そうは見えないけど」

リリアはトラキアル号の元奴隷たちに目を向けた。彼らの多くが、リリアと目が合いそうになると慌ててそっぽを向いた。明らかに、リリアを恐れている。

「ああ……まあ……みんな海賊に捕まったせいでちょっと神経質になってるんだ。君が海賊たちを倒してくれなかったら、我々は悲惨な目に遭っていた。そのことはみんなちゃんと理解している」

男は申し訳なさそうな顔で苦笑いした。

「あなたはあたしが怖くないんですか？」

リリアはオブラートに包むことなく訊いた。

男はハハハッと大げさに笑った。

「敵にするのは恐ろしいかもな。だが味方としてはとても頼もしいぞ。」

私はトラキアル号の副船長、イエミン・ウォークスだ。シオン君に頼まれてこの船の臨時船長を務めることになった。よろしくな。後で他にも何人か来る。君を無事にデイルシアへ送り届けるよ」

「……あっそう」

「じゃあ、何か用があったら気兼ねせず話しかけてくれ」

「うん」

ウォークスとかいう船乗りは、甲板後部の建物に入って行った。

（あいつ怪しいな……）

いや、ウォークスだけではない。ここにいる人全員が、自分を殺そうとしている、そんな気がしていた。——1人を除いて。

命の恩人、シオン・アーミラー。リリアは彼がわからなかった。スパイというのは恐らく本当だろう。あのアールスとのやり取りが芝居だとは到底思えない。

だが、何故自分を助けてくれたのだろうか。《治癒》魔術をかけてくれたし、親しげに接してくれた……。

もう誰も信じないと決めていたリリアの心の隙間に、彼はいともたやすく侵入してきた。もしかしたら精神に干渉する魔術や能力を用いたのかもしれない。あるいは、アールの言う通り、ただのお人好しの馬鹿か。

（気でも狂ったか、あたし。人を見たら泥棒と思え、だよ。どうせあいつはあたしを何かに利用するつもりなんだ。だから……だから……）

リリアは激しく首を横に振った。肩がズキズキと痛んだ。

（頭を冷やせ、リリア……）

シオン・アーミラーが何を企んでいるのかは、これからの観察で掴んでいくことにして、今は何か別のことを考えよう。

リリアは、初めての自己紹介の時のことを思い出した。

（フリースって名乗っちゃったな……）

当初の計画では、カレムシルト姓を名乗るつもりだった。その方が後々都合だからだ。

（『地球では、男の子は父親の、女の子は母親の姓を継ぐんだ』……この説明で問題ないかな。文化の違い、利用しない手はないね）だが後悔はしていない。いや、むしろ、これで正解なのだ。リリアはそう自分に言い聞かせた。

——自分は、“リリア・カレムシルト”でも“小瀬^{おせ}りりあ”でもない。リリア・フリースなのだから。

向こうの船の話は終わったようだ。

シオンはトラキアル号の船べりまで歩くと、一度、リリアに笑顔を見せて、何かを呟き、高く跳躍して霹靂号に着地した。

（《風おこし》の魔術による浮遊術……すごいんだ、あいつ）

何事もなかったかのように颯爽^{さっそう}と歩み寄ってくるシオンに対し、リリアは努めて警戒心を呼び起こそうとした。だが、どうにもうまくいかない。

「肩の具合はどうだい？」

「……ちよっと包帯に血が滲んでるけど、痛みは大分退いた」

「それはよかった。」

リリア、これからなんだけど……向こうの船は商船で、納期までにどうしてもラムドネリに——ああ、北西の大陸の沿岸国だよ——そこに着かないといけないらしくってね。だから、船乗りを最低限の人数この船に割いてくれることになった。ウォーセスさんにはもう会ったね」

いつの間にか、霹靂号にはさらに数人の船乗りらしき人たちが乗り込んできていた。誰もこちらに近づこうとはしない。話を邪魔したくないだけなのか、あるいは……。

「この船は準備ができ次第、偏西風帯まで迂回してクレイティラムに向かうよ。君のお父さんに会えるまで、あと4、5日ってところかな」

「そう……」

できたら会いたくないけど、という思いをリリアは心の中に留めた。

「そういえばまだ聞いてなかったけど……この世界には何をしに？旅行？」

シオンが笑顔で訊いてきた。

「……」

思わず体が震える。

この質問は覚悟していた。答えも用意してある。だが——

(忘れたいの……)

不快な記憶が蘇る。喪失と恐怖と絶望の記憶が。

きっとライルの所に着いた後も、この質問を幾度となくされ、その度に精神的苦痛を味わうのだろう。予測可能回避不可能というやつだ。

リリアは無意識に拳を強く握りしめていた。手に血が滲む。当分

爪を切っていなかった。

「……逃げてきたんだ」

感情を表に出さないように、リリアは作り笑いを浮かべて答えた。

「……え？」

「亡命だよ、亡命」

「……」

シオンの顔に笑みはもう無かった。

「……何があったんだ？」

やはり来た、想定内の第二の質問。ここから大嘘オンパレードの始まりだ。

リリアは不自然に聞こえないように気をつけながら、すらすらと答え始めた。

「ちょっとしくじっちゃったみたいだよ、父……さんが」

「ちょっととって……。子連れで亡命しなくちゃならないような失敗って一体……？」

「あたしは知らない。父さんが瀕死状態で帰って来て、『逃げるぞ』って言ったんだ。あたしは父さんの言う通りに、父さんに『ヴェデム』の呪いをかけて、異界間の門まで連れて行って、ここに来たってわけ。何でこんなことになったのか、あたしが訊きたいくらいだよ」

「……『ヴェデム』？ あの護りの呪いを？」

「うん」

「でも……」

「もうあたしが知ってることは無いよ。ね、この話は終わりにしよう。知らないことを訊かれまくってもストレスが溜まるだけだし」

「……ごめん、そうだよね」

シオンは渋々だが追及を終えてくれた。

謝られるとは思っていなかったリリアは、罪悪感で胸が痛んだ。
(知らないこと、ね……よく言うよ。思いつき当事者のくせに)

「あれ……？」

いつの間にか、船の進行方向の水平線のあたりが青白く光り始めている。

「日の出……じゃないよね。月の出？」

「ああ。ブルウンっていうんだ」

シオンは元の調子に戻っていた。

「そういえば、地球の月は欠けるって、昔読んだ本に書いてあった覚えがあるんだけど、本当？」

「……は？」

地球の月は欠ける？ リリアは耳を疑った。それってまるで——
「まさか、ハルシェの月は欠けないの？」

シオンは初めてそんなこと聞かれたという風な顔をした。リリアの方がその顔をしたいくらいなのに。

「欠けないよ。というか、どうして地球の月は欠けるの？」

「そりゃ欠けるでしょ。日光の当たり方が日々変わるんだから」

「日光？ 何で太陽の話が出てくるんだ？」

「何でって……えーと、月はハルシェの周りを回ってるよね？」

「うん、そのはずだけど？」

……なるほど。これはつまり、この世界の月は自ら発光するということか。

(月……)

また嫌なことを思い出してしまった。

リリアは話題を変えたいと思ったが、その前に一つ、確認しておきたいことがあった。

「ところで、今、この船は西に向かってるんだよね？」

「え？ うん。夜が明けたら南に向かうけど」

リリアは、足下に転がしている2つのトロリーバッグの上にかけていたコートのポケットから、方位磁針を取り出した。

シオンから隠して針の指す向きを見ながら、シオンに確認のための質問をする。

「北はどっち？」

「えーと……〈天の息吹〉が出てきた方角だから、あっちかな？」

シオンは、誤差の範囲内で針の赤い方が示す方角を指差した。

「東は？」

「あっちだと思う」

「南は？」

「たぶんあっち」

シオンはリリアの方位磁針の通りに指差した。

エティア語は抽象概念をちゃんと伝達してくれている。となると考えられるのは2つの可能性。

「日が昇るのはどの方角？」

「東だけど」

リリアはため息をついた。

「把握した……。要するに、ここでは日は東から、月は西から昇るんだね？」

「ああ、そうだよ。君の世界は違うの！？」

「……うん。どっちも東から昇る」

リリアは、惑星ハルシェと月ブルウンを宇宙から見た立体映像をイメージした。

（速っ……）

惑星ハルシェの自転周期よりも月ブルウンの公転周期の方が短い。それはつまり、月が惑星の周りを、北極側から見て反時計回りに半端じゃない速さで公転していることになる。

果たして物理法則は正常に機能しているのだろうか？

不気味極まりない。船の揺れも相まって、リリアは気分が悪くなってきた。

「顔色が悪いよ、リリア」

「うん……。悪いけど、しばらく話しかけないで」

「……わかった。じゃあ僕は船橋楼で、本国と通信が繋がるか試してくるから」

シオンはさっきウォークスが入っていった建物を指差した。あれが船橋楼というのか。

水平線から僅かに覗いた月の一端に視線を固定したまま、リリアは頷いた。

シオンが船橋楼に消えると、リリアは天を仰いだ。

気分はまだ優れない。だが、やらなくてはならないことがある。

目を閉じると、リリアは、エティア語ではなく日本語でそつと呟いた。

「よし……そろそろかな」

ここに来てようやく、リリアはサイコネシスの能動的使用を完全に終了した。

シオンは、リリアが4物体を同時制御できるということに驚いていたが（当然リリアはそのことを知らない）、リリアが同時制御できる物体の限界個数は、4ではない。5だ。

初め、2つのトロリーバッグと2丁のレーザー銃を空に浮かべていた時、実はもう1つ制御していた物がある。

上を向いたまま、コートのポケットから異能を使って携帯電話を取り出した。

待つこと数秒。待ち構えていた通り、それは電子音を鳴り響かせ始めた。

近くで死体の処理をしていた数人の船乗りたちが、一斉に驚いて軽く飛び上がった。その光景を少し可笑しげに思いながら、リリアは電話に出た。

「静止軌道には乗れた、オーム？ ……いや、静止軌道って言うべきじゃないかな？」

『パスワードは？』

リリアの問いも、スピーカーから聞こえてくる女性の声も、日本語だった。

「あーはいはい。“あかきたなはまやらわ”」

『認証。』

こちらへオムニシエンス。静止軌道に無事乗りました。搭載機器に異状はありません』

駅のアナウンスのように滑らかで聞き取りやすい女声に、機械らしさはほとんど感じられない。

「少しくらいあたしを労^{ねぎら}ってくれてもいいんじゃない？ あんたを宇宙まで送ってやるのは割と大変だったんだよ」

『申し訳ありませんでした。お疲れ様です、リリア』

リリアは吹き出した。

「ごめん、冗談だよ。人工知能にそんなコミュニケーション能力は期待してないって」

何であんなこと言ったのか、リリアは自分でも不思議だった。たぶん、今この世界で地球でのリリアを知る唯一の存在である彼女に、並々ならぬ親近感を抱いていたのだろう。絶対に自分を裏切ることのない、汎用人工衛星に搭載された量子コンピューターへオムニシエンスに。

「ところで、クレイティラム群島の位置はわかった？」

『はい』

「あいつはそこにいる？」

『ライルのことを言っているのなら、はい。彼は無事、目的地に出現しました』

「へえ、海底から回収することにならなくてよかったよ。

あ、そうだ。ハルシエの全体像見せてくれない？」

『了解しました』

僅かなタイムラグの後、携帯にメールが送られてきた。添付された画像ファイルを開くと、そこには――。

「……何これ」

『赤外線画像です』

「期待を返せ！」

『どういう意味ですか？』

「……いや、いい。あたしが悪かった。今、夜だもんね。可視光線画像が見れるわけないよね」

馬鹿丸だしな八つ当たりをしてしまった自分にリリアは嫌気が差した。疲れているのだろうか。能力で量を抑えたとはいえ、かなり出血したし。

（そういえば、当分寝てないな……）

リリアはこの船で安眠できる気がしなかった。敵だらけのこの船で。

『リリア、あなたの持つ追跡用発信機からの情報によると、あなたは今、海上、あるいは孤島にいることになります。事実ですか？』

「事実だけど」

『双子石は持っていますか？』

「持ってるよ。さっき確かめた。おかしいよね。あたしはあいつの隣に落ちるはずなのに。やっぱり一筋縄じゃないのかな、異世界って？」

『双子石に不具合があった可能性が高いです。それ以外の要因がある可能性もあります』

「そっか……」

じゃあ予定通り、《念道》で軌道修正しながら、クレイティラム群島上空からの監視をお願い」

『了解しました』

「頼りにしてるよ。じゃあn——」

『待ってください、リリア。報告すべき事項が2点あります』

「——え、何？」

これは想定外だ。一体何だろう？

『1点目。この世界の月は——』

「あーそれはもう知ってる。自分で光ってて、おまけに公転周期が母惑星の自転周期より短いんでしょ」

『その通りです』

「そのくらいあんたに教えてもらわなくてもわかることだよ」

このコンピュータは、自分の天文学の知識を侮っている。天文オタクのリリアはそれが少し面白くなかった。機械に腹を立てても仕方がないが。

『2点目』

どうせその2点目とやらも、自分を馬鹿にするような内容なのだろう。リリアはそう考えていた。だが――

『宇宙船を発見しました』

「……は？」

『宇宙船を発見しました』

「……」

リリアは耳を疑った。誰だってそんなことを言われたら、自分の耳が信じられないはずだ。

ハルシェに、魔法の世界に、未だに帆船が船舶の主流である発展途上の世界に、宇宙船？

「……画像を」

『了解しました』

メールを受信。添付ファイルを展開。

リリアは今度は目を疑った。

「そんな……ありえない……。だってここは……子宇宙、異世界なんだよ！」

画面には、漆黒の背景の上に、確かに宇宙船が映っていた。

地球製の宇宙船だ。普通教育を受けた地球人なら、誰でも断言できる。

その宇宙船には、所々掠れているが、脳内で補完することで辛うじて読み取れる「UNITED STATES」の文字と、赤・青・白の3色で彩られた星条旗が描かれていたから。

リリアはそれと同じものを、地球で、インターネットで見たことがある。それだけではない。トロリーバッグの中に入っているリリアのノートパソコンのハードディスクに、その画像が保存されているはずだ。

「アポロ宇宙船が……ここにあるわけ……」

魔法の世界で見つけた場違いな遺物。

あまりに衝撃的なその存在に打ちのめされ、
リリアの声は尻すぼみに小さくなっていった。

05 不老不死の魔術師

【クレイティラム デイルシア】

(……どこだ、ここ?)

目を覚ました彼が最初に見たものは、妙に見慣れた幾何学模様が描かれた、ベッドの天蓋だった。

天蓋付きベッドの足側と左右は白い半透明のカーテンが開かれており、たくさんの人が自分をのぞき込んでいるのが見えた。

絢爛な照明が天井の至る所に灯されていることから考えると、夜だろうか。

体を起こそうとするが、うまくいかない。疲労感が尋常ではなかった。

薄緑色の高級そうな上衣を身に纏った若い女性が、彼の一番近くで椅子に座っていた。

驚くべきはその髪の色。深緑色だ。彼女の周りにいる人間も、青や紺といった、見慣れない色の髪をしていた。いつからホモ・サピエンスのDNAはこんな風にふざけ始めたのだろう。

「お目覚めですか、ライル様」

彼女は優しそうな笑みを浮かべて、親しげな声で話しかけてきたのだが、その裏によそよそしさ、いや、恐怖心が含まれているのを彼は感じ取った。

ライル——彼はその名前を聞いたことがあった。だが、それが自分の名前であるとは思えなかった。自分の名前といったら、人間の魂に最も深く刻まれる語句のはずだ。聞いたことがある、程度の印象しか浮かばないのなら、それが彼の名前であるはずがない。

(じゃあ、俺の名前は何だ?)

自問するが、自答できなかった。

名前だけではない。この場所はどこなのか、何故自分はここで眠っていたのか。いや、それだけならまだいい。彼は故郷や家族のことすら思い出せなかった。

重度の記憶喪失。

この女は、自分のことを知っているのだろうか。だが、何から聞いたらいいのか考えようとすると、混乱して頭が痛くなった。

「あんた誰だ？」

ぐちゃぐちゃな思考の中から最初に言葉にしたのは、この質問だった。

女はキョトンとした顔でこちらを見ている。明らかに通じていない。

今のは英語だった。次はスペイン語を試そうかと口を開きかけて、彼は思い出した。さっき自分は、確かにこの女の言葉を理解したではないか。

(エティア語……?)

それは、思い出ではなく知識。そのためなのか、彼はこの単語から連想されるあらゆる知識を自らの記憶の奥底から拾い集めることができた。

マナ、ソウエル、魔法、魔術——自分が魔術師だという事実。

「あんた誰だ？」

彼はエティア語で訊いた。今度は通じたようだ。

「私はクレイティラム連合王国の摂政、第一王女のメイリセラ・わたしノウ・クレイティラムと申します。

ハルシエにようこそ、ライル・カレムシルト様。私どもはあなたを歓迎します」

「え、あ、それはどうも……」

彼——ライルは、必死に記憶の糸をたぐり寄せた。だが、妙に聞き覚えがある「ハルシエ」や「クレイティラム」という単語が地球上のどこを表しているのか、どうしても思い出せなかった。

「……えーと、浅学で申し訳ないのですが——」

相手が王女だというのは知って、ライルは言葉遣いを改めた。

「——クレイティラムっていうのは、どこだ？　あと、ハルシェっていうのは？」

だが、相手の腰がやけに低いせいか、長くは続かなかった。

ライルの質問は想定外だったようで、王女は当惑した表情を浮かべた。

「……ご存じありませんか？」

「ああ……。自分が何者なのか、どうしてここにいるのかもさっぱりだ」

ライルはやれやれという風に両手を動かした。

誰も文句を言わないのをいいことに、ライルは不遜な態度を取り続けていた。

ますます当惑した王女は、すぐ横にいた男に、ライルの知らない言葉で何かを訊き始めた。

王女と男がいくらかやり取りをしている間、ライルはベッドの頭側の

壁に張られた鏡を凝視した。

そこに映るのは、紅毛碧眼の白人青年の姿。歳は20くらいだろうか。

半袖Tシャツに半ズボン。散歩にでも行っていたのかと思うようなラフさだ。

Tシャツには黒で英文が書かれている。初めライルは、Tシャツのデザインだと思っていたが……違う。英文は1つのまとまりとして半回転していて、着ている者が読みやすいように書かれている。それを読むと――

『不老不死のふりをしろ。　お前自身より』

（お前自身……これを書いたのは俺？　過去の俺は、自分が記憶を失うことになるって知っていたのか？　というか、不老不死のふりってどういうことだ？）

ライルはわけがわからなかった。自分をこんな状況に追い込んだ

過去の自分が憎くてたまらなかった。

「ライル様、あなたは記憶を失っています」

メイリセラ女王が再びライルに話し始めた。

「あなたにかけられた呪いのせいです」

「呪い!?!」

「はい。《ヴェデム》の呪いです。この呪いには副作用があつて、あなたは術者に関する全ての記憶を失ってしまいます。

それだけならまだよかったのですが……どうやら呪いは完全には成功しなかったようです。そのせいであなたは、術者とは無関係の記憶まで失ってしまったと思われます」

どこのどいつだその無能は、とライルは心の中で悪態をついた。

「……その術者はどこに?」

「今はまだわかりませんが、恐らく、あなたの後にこの世界にやってきたもう1人の異世界人だと——」

「ちょっと待ってくれ! 異世界人? それってまるで………も
しかして、ここって地球アースじゃないのか?」

「……ええと、アースというのは存じ上げておりませんが……あな
たは地球という世界から、ここハルシェにいらつしやったのです」
ミダンヤード

ミダンヤード……ミツダンイエアルド……「地球」を意味する古
英語。ライルの知識は彼にそう教えてくれた。

「つまり……俺は異世界に来た、と?」

「はい」

「……そうか」

道理で髪の色が変だと思った。よく見れば、瞳の色は赤系統だし。
ライルは絶望した。唯一の頼みの綱だった彼の知識と常識も、異
世界ではあまり役に立つとは思えない。

「……そういえばさっき、記憶が消えたのは呪いの副作用だつて言
つてたよな。じゃあ主作用は何だ?」

副作用が記憶喪失なら、主作用は一体どれだけ迷惑極まりないも
のなのだろう? 自分で訊いておいて、ライルは半ば、答えを聞き

たくない気分だった。

「魂の保存です」

「……は？」

「《ヴェデム》は護りの呪いです。あなたの魂は今、行方のわからない術者の魂の中に保存されています。そして、その術者が無事な限り、あなたは死ぬどころか、怪我をすることもありません」

「……その術者は何者なんだ？ 何がしたいんだ？」

「私どもには見当もつきません。恐らく、本人のみが知ることでしょう」

結局、この状況に陥ることになった経緯はわからずじまいだ。術者とやりに会えない限りは。ライルのストレスは肥大化の一途を辿っていた。

突如、部屋の外が騒がしくなった。

ライルのベッドを取り囲む面々のほぼ全員が、扉の方に視線を向ける。ただ2人、王女の両隣に立つ男たちだけは、悠然と構えてライルから一瞬たりとも目を離さなかった。

扉が開き、外から入ってきた者が大声で何かを報告した。

またライルの知らない言語だった。だが、それを聞いた者全員が——特に、王女の隣に立つ2人の内、先ほど王女と話していない方の男が——驚愕の表情を浮かべたことから、かなりの大事が起きたと思われる。

「何かあったのか？」

恐る恐るライルは尋ねてみた。王女は彼の存在をすっかり忘れていたようだった。

「……術者が見つかりました。名前はリリア・フリース。12歳くらいだと思われる少女です。あなたの娘だと名乗っています。たった今、彼女を保護した我が国の兵士から通信がありました」

ライルは思わず吹き出した。

「そいつ、嘘が下手すぎるだろ。12歳って……俺がいくつの時に

生まれたんだよ」

だが、そう考えたのは彼だけだった。

「いえ、十分にあり得ることだと思えます」

王女は大真面目な顔でそう言った。周りの人間も同意見のようで、何人かは軽く頷いていた。

「何言ってるんだ？ まあ確かに、そいつが本当は10歳くらいで、俺が20代後半だとしたら、あり得なくはないが……でもな——」

「やはり、そのことも忘れてしまわれたようですね」

「……何だ、そのことって？」

「あれをご覧ください」

王女は立ち上がり、周りの者たちと一緒に脇によけた。おかげでライルは、彼らに遮られて見えなかった部屋の壁が見えるようになった。

そこには、一枚の絵が掛けられていた。深緑色の髪をした中年の男と、赤毛の少年の絵——

「あれは……俺？」

「はい」

その少年は、ライルが先ほど鏡で見た自分と瓜二つだった。隣の男はこの世界の人間、ハルシェ人だろうか。

（俺はこの世界の人間と会ったことがあるのか……）

やはりその記憶も無かったが、ライルはこれで、メイリセラ王女が自分の名前を知っていたのに納得できた。

「隣にるのが、クレイティラムの建国者、初代国王のラミウス・カレムシルト・クレイティラムです」

「へえ。この国ってできたばかりなんだな」

「……いいえ。この国は建国以来974年の時を経ております」

「……は？」

ライルは王女が自分に何を知ってほしいのか理解しかねていた。「単刀直入に申し上げます」

そんな彼の思いを悟ったのか、王女は回りくどい言い方をやめる

ことにしたようだった。

「あなたはラミウスと同じ、千年前の人間です」

★☆☆★

「リリアっ！ 聞きたいことが……」

シオンは船橋楼から飛び出した。たった今本国とのソウエル通信で聞いたことがなかなか信じられず、今すぐリリアに直接確認をとりたかったのだ。だが、すぐに視界に入ったリリアの様子を見て、勢いが殺がれた。

リリアは、光を発する謎の小型の物体を見て呆然としている。明らかに様子がおかしい。

「……リリア、大丈夫？」

「……大丈夫。あたしはこのくらいでうろたえたりしない……」
すでに十分すぎるくらいうろたえている。

「何かあったの？」

「……気にしないで。あんたにはきつと関係ないことだから
それより、あたしに何か聞きたいことがあるんじゃないの？」

「そうだった！」

リリアをうろたえさせたことにも興味はあったが、シオンはとりあえず、自分の用件を優先することにした。

「リリア、君のお父さんって……ライル・カレムシルト？」

リリアは手に持つ謎の物体をズボンのポケットに突っ込むと、涼しげな笑みを浮かべてシオンの方へ向き直った。

「そうだよ。通信は繋がったみたいだね」

「でも、君の姓は……」

「地球ではね、男の子は父親の、女の子は母親の姓を継ぐんだ」
何てへんてこな風習だ。シオンはリリアの言うことが容易には信

じられなかった。だが、ハルシエにもシオンが信じられないような風習がたくさんある。人肉を食ったり、生け贄を捧げたり……。それを考えると、むしろこのくらい、大人しい方なのではないか？

いや、そんなことはどうでもよかった。シオンが一番聞き出したことは別にあった。

「ライルは……何歳なんだ？」

「えーとね……」

リリアは目線を斜め上に移動させ、少しの間考え込んだ。

「2102引く1054……1048歳かな？ 父さんは年をとらないんだ。特殊型異能だよ、“不老不死”のね」

06 非力な少女

シオンが船内から甲板へ上がってくると、異様な光景がそこにあった。

「それえっ！」

7歳の少女が満面の笑みで、力一杯に放り投げた——リリアを。

「うわあああ」

棒読みの悲鳴を上げながら、帆桁ブームの高さまで飛ばされるリリア。

7歳児の《念動》の魔術では、石ころを短時間浮かべるので精一杯のはずだ。シオンはすぐに、夕べのリリアの話を思い出した。

（本当に軽いんだな……）

地球の重力は、ハルシェよりかなり強いらしい。それなら、リリアの体が地に押し潰されないように軽くできていても不思議ではない。シオンはリリアのあの説明を信じきっていた。

ラミウス・カレムシルト著の地球探検記『呪われし世界』をシオンは幼い頃愛読していたが、その中には、ラミウスが高重力で押し潰されそうになったという描写はない。

だが、この千年の間に地球で何が起こったかなんてシオンが知るはずもなかった。

惑星の重力は変わることもあるんだと、シオンはリリアを疑わなかった。そもそも、こんな嘘をつく必要性がシオンには思い当たらなかった。

ところでこの状況だが、どうやら、エシルの面倒をリリアが見ているらしい。

エシルというのは、今この船の臨時船長を務めているイエミン・ウォーケスの一人娘だ。

何でも、トラキアル号の出航直前にエシルの母が病に倒れたらしく、代わりに彼女の面倒を任せられる人間が近くにいなかったため、

ウォークスは彼女を航海に同行させることにしたそうだ。

彼女は夕べの戦闘時、父親に目を瞑るよう言われていたため、リアによる虐殺、否、処刑の光景を見ていない。そのせいか、彼女に目にリリアは、突如現れた正義の味方の戦乙女としか映っていない。

今朝、トラキアル号と別れるときにこちらの船に移ってきた子供は彼女1人だ。結果、エシルが一番歳の近いリリアに遊んでもらおうと近づいたのは必然といえるだろう。

リリアは初め、とても嫌がっていた——なぜか怯えているようにも見えた——が、今はまんざらでもないという顔をしている。年下の子供の面倒を見るのに慣れている様子だ。妹か弟がいたのだろうか。いたとしたら、彼らは今どこに？

(もうこの世にはいない……?)

亡命してきたということは、その可能性が高いだろう。

「ねえ、ちょっと休憩……」

両手両足で軟着地したリリアは、立ち上がると疲れた表情を浮かべてエシルに言った。

リリアは顔色が悪い。船酔いではないらしいから(「サンハンキカン」が強いとか何とか言っていたが、シオンにはさっぱりだった)、きつと疲れがたまっているのだろう。

シオンは夕べの本国との通信で、三巨頭、摂政・宰相・元帥から直々に、首都デイルシアに着くまでの間リリアを護衛するよう命じられていた。その護衛任務の内容には、彼女の健康管理も含まれている。

そんなわけで、任務を受けるとすぐに睡眠をとるよう勧めたのだが、リリアは「薬があるから」と言って聞かなかった。一体何の薬なのだろうか。

「えー」

エシルが目に見えて落胆した。無理もない。今この船に他に遊び

相手はいないのだから。

「シオン、もしかしてあたしに用？」

リリアがエシルの方を向いたまま、つまりシオンに背を向けたまま訊いてきた。

シオンは思わず後ずさって、階段から落ちそうになった。

「いつから気づいてたんだ!？」

リリアは一度もシオンの姿を目にしていな。ずっと彼に背を向けていたのだから。

おまけに、シオンの魔力は生まれつき安定しており（シオンが魔術師として優秀なのはそのためだ）、魔源ソウエルの揺らぎから気配を悟られたことは今まで一度もない。

音？ 足音は確かに立てたが、さっきから数人の船乗りが通っている。シオンだと特定するのは不可能だ。

つまり、リリアがシオンの存在に気付いていたはずがないのだ。

「いつからって、あんたが上がってきた時からだけど」

リリアが振り返って、何も読みとれない表情で答えた。

「でも、君は僕の姿を見てないよね？」

「……いやいや、見えたよ」

間があった。失敗に気付いて、慌てて取り繕うような……。

「で、話はあるの？ ないの？」

「……ああ、あるよ。エシル、少しの間お父さんのところにいくれるかい？」

シオンは船橋楼を指さして言った。エシルは不服そうだったが、こくりと頷いて言う通りにしてくれた。

エシルが船橋楼の扉の向こうに消えるのを見届けると、シオンは真剣な顔つきで話し始める。

「君、ジェヴィアの頭について妙なこと言ってたよね」

「あの男の頭が悪いのは別に妙なことじゃないと思うけど？」

「いや、そのことじゃなくて……」

リリアは真顔で言っている。冗談の類ではなさそうだった。

「ほら、鉄板が入ってるとか言ってたよね？」

「ああ、そのことか。どうだった、やっぱり入ってた？ 鉄板」

「いや、全く。試しに後頭部に短剣を刺してみたけど、普通に刺さったよ」

今し方確かめてきたところだ。

ちなみにジェヴィア海賊団員のうち、ジェヴィアを初めとする賞金首たちの死体は、船内で《腐食防止》の魔術をかけてちゃんと保存してある。

賞金首でない海賊たちの死体は……海のみがその行方を知っている。

懸賞金は実際の成果に応じた分配をすることになった。つまり、山分けだ。

実は、止めを刺した賞金首の数はシオンの方が多い。リリアの攻撃を粘り強くしのいだ3人の手練と、首領ジェヴィア。4人とも高額の懸賞金がかかっていた。

一方で、リリアが殺した者たちの中には3人しか賞金首がおらず、いずれもシオンの4人と比べたら低額だった。

だが勿論、シオンが彼らを殺せたのはリリアの助力があったからだ。シオン一人では何もできなかっただろう。シオンとしては全部リリアの功績にしてやりたかったのだが、リリアはそれを拒否し、結果、こういう分配となったのだ。

互いに金銭に困っていないからこそ、平和的解決だった。

「でもね……君が投げた短剣の方はともかく、脳天の穴は、他の海賊と同様に頭蓋骨まで開いてるんだ。ただ一つ違うのは、奴の脳みそが溶けた形跡が無いことかな」

「……頭蓋骨の下に鉄板？」

「ひとまず鉄板から離れよう、リリア……」

結論を出す前に、一点訊きたいことがある。君はあの武器でどうやって人を殺したんだ？」

「高出力赤外線レーザーを……見えない強い光を照射して、頭皮と

頭蓋骨と脳を溶かしたんだよ」

「……溶かすってことは、熱が発生するんだよね。そのせいで一時的に気を失って……でも、何で脳が溶けなかったのかはやっぱりわからないな」

「頭蓋骨の下にシールドを張る魔術ってありえない？」

「ありえないね。……うん、迷宮入りだな」

「ちっ」

夕べ彼女が化けの皮を現して以来、シオンはずっと思っていたのだが、どうもこの少女の口調は男勝りで、話すのも大人顔負けの内容だ。

（あれ……もしかして？）

シオンにはふと思いついたことがあった。

リリアの父は、ライル・カレムシルト。リリア曰く不老不死の、千歳を越える人間だ。では、リリアは――

「……ねえ、話は変わるんだけど、君って何歳？」

シオンは恐る恐る訊いた。

女性に年齢を聞くのはこの世界でもタブーだ。

もちろんこの場合、女性というのは成人女性のことだから、リリアには当てはまらない――彼女が外見通りの年齢ならば。

リリアはしばらく黙ってシオンの顔を不思議そうに見つめていたが、やがて合点がいったようにふふっと笑った。

「あたしは不老不死じゃないよ。父さんの異能は遺伝しなかった。代わりに別の異能を手に入れたけどね」

シオンの予想は外れた。いや、本当は予想というほど本気で考えていたわけではない。リリアの口調からさすがに老練さは感じられなかったからだ。

「まあ、そうだよね……。それで、結局いくつなんだい？」

「……何歳に見える？」

茶目っ気たっぷりな表情と口調で訊いてきた。何故か目は期待できらきらと輝いている。その仕草がシオンにはあどけなく映った

彼女なりのコミュニケーションなのだろう。シオンは乗ってやることにした。

（身長から考えると12歳くらいかな……でもこんなにしっかりした12歳児は……いや、ディレムの奴も結構しっかりしてるしな……）

シオンはまず、故郷にいる弟同然の友人を思い浮かべた。彼は13歳で、今年魔術学院に入学した。

次に思い浮かべたのは、今下で牢に繋がれているアルース。14歳だ。彼より年上ということはないだろう。

「うーん、低めに見て13歳かな？」

リリアはエシルに負けないくらいの満面の笑みを浮かべた。

「おみごとっ！ 大正解！」

「ええ、本当!？」

「ああ、ちょっと待って。1つ重要なこと訊くの忘れてた。この世界の1年って何日？」

リリアの意図するところにシオンはすぐ気が付いた。

2つの世界の1年の長さが異なれば、何歳かという質問は意味をなさない。

「365日。いや、正確には365と4分の1日だけど」

リリアの顔から笑みが消えた。

「……1日は何ジカン？」

「ジカン？」

「あー、えっとね、“日”の次に短い時間の単位は？」

「シュピアだよ。1日12シュピア」

「……その次は？」

「1シュピアが120ツピ。その次は1ツピ120ルム」

「……」

リリアは呆然としながら、手首に巻いた小型の機械リストユニットというらしいを操作した。

「ねえ、そのルムっていうのを声に出して数えてみて。1、2、3

……って」

「え？」

不思議なことを言う、とシオンは思った。

時間は声に出して数えるものではない。舌が回らなくなるのだから。

「えーと、手拍子でいいかな」

「うん、いいよ」

シオンはルムを手拍子で刻み始めた。その間リリアはずっとリストユニットを見つめていた。

「……同じだ。1日の長さも、1年の長さも」

「本当に！？　すごいね、偶然かな？」

「まさか。必然だよ」

リリアはしばしの間考え込むように手の甲を額に当てると、やがて、彼女に似合う知的な笑みを浮かべてぶつぶつ呟き始めた。

「（※以下日本語）なるほど、生命誕生の最適環境条件というわけか……。もしかしたら内惑星や外惑星との位置関係も同じかもしれないな……。いや、待てよ。月は……。？　そういえば、実体が――」

リリアは完全に自分の世界に入ってしまった。

今リリアが何を言っているのかはわからないが、少なくともシオンが必要としていた情報は手に入った。

（そうか……。13歳か……）

シオンは自分がその年齢だった頃を思い起こした。

飛び入学と飛び級をしたので魔術学院4年生だった当時の自分は、魔術も戦闘能力も同年代の少年たちとは一線を画していた自覚があるが、それでも今のリリアのように1人異世界へと放り出され、海賊と戦う羽目になれば、きっと何もできないだろうという確信がシオンにはあった。

彼女は強い。戦闘力、精神力ともに。

肩を刺されても泣かず、父親と離れていても寂しそうな顔一つしない。

これが、千年を生きた大魔術師の娘なのか――

「ねえシオン、あの人たち何やってるの？」

現世に戻ってきたリリアが訊いてきた。

彼女の指差す方向では、2人の船乗りが木刀を剣代わりに戦っていた。周りにいる数人が楽しげにはやし立てていることから考えても、暇つぶしの模擬戦闘だろう。

そう説明すると、微動だにせずにそれを注視し始めた。何かを学び取ろうとするかのように。

彼らの実力は、シオンの目から見れば素人に毛が生えた程度だ。

正直言って、あまり学ぶところはない。

「剣術に興味があるのかい？」

「無いよ」

リリアは不愉快そうに顔をしかめて答えた。

「でも関心はある。あたしって、接近戦に持ち込まれたらただの子供と変わり無いから……。あの海賊長に襲われた時、あたしは避けるしかなかった。1撃目は何とか避けられたけど、2撃目は……ご覧の通りだよ」

そう言ってリリアはシャツの上から自分の左肩口を撫でた。

「レーザー銃が無かったら何もできないんだ。魔術はろくに使えないし、この異能だって攻撃には向いてない。非力だね、無能だね、あたしって……」

今までシオンは全く気付かなかったが、リリアは彼女なりに深刻に悩んでいたようだ。

シオンにしてみれば、リリアはすでに十分すぎるほど強いと思うのだが……。

まあ確かに、下手をすれば致命傷となっていたかもしれない向こう傷を負わされれば、自分の力に危機感を抱くのも仕方ないと言えは仕方ない。

「そうだっ！」

リリアが勢いよく首を振って、最高の考えが思いついたかのよう

にキラキラした目でシオンを見つめた。

「ねえっ、あたしと戦ってくれない！」

「え！？」

「接近戦に慣れておきたいの！ あんた、接近戦得意そうだし」

「慣れておくって……君は誰と戦うつもりなんだ？」

「これから出会う無法者どもだよ。海賊がいるくらいなんだから、クレイティラムにもそういう連中がわんさかいるんでしょ？ この世界」

心外だ。クレイティラムは、ハルシエで一番治安がいい。第一、海賊くらいどの海にもいるだろうに。

「君の世界にはそういう連中はいなかったっていうのか？」

「あたしの住んでたコロn……街はできてから数年になるけど、2人しか犯罪者は出てないよ。まああたしの街はちょっと特殊だけど……でもね、あたしの国は地球で一番治安がいいって言われてるんだよ。それに海賊なんて低脳な連中は百年前に世界中から滅んだし」シオンは信じられなかった。

地球では誰も魔術が使えないから、その文明度は低い、というのは誤りだと理性ではわかっている。あんな非魔術兵器を見せつけられたのだから当然だ。

だが、幼い頃に根付いた偏見は完全には捨て去れない。向こうの方が治安がいいと言われても、実感がわかなかった。

「……ま、まあ、治安云々は置いといて……そういう無法者がどうして君の命を狙うんだ？」

「つい数ジカン……ああ、数シュピア前に殺されかけたばかりじゃん。屑の考えることなんてわかんないよ」

「……はあ。まあ確かに、君の言うことも一理あるよ。でも……。リリア、これだけは言わせてくれ。僕は君の護衛任務を命じられている。君が戦う羽目にならないよう、命をかけて君を守るよ！僕を信じてくれないかな？」

我ながらよくこんな気恥ずかしい台詞を吐けたものと、シオン

は自分自身に称賛を送った。

「なっ、なっ、何言ってるのっ!? 馬鹿じゃないのっ!?」

リリアは赤面して、しどろもどろにそう言った……のなら可愛げがあったのだが――

「……何言ってるの、あんた? ちょっと引くなあ……」

――実際に返ってきたのは、引きつった表情を浮かべたりリアの、この言葉だった。

赤面したのはシオンの方だった。

「……」

「それで、あたしと戦ってくれる?」

「……ああ、いいよ」

承認の理由として一矢を報いてやりたいというのが一番大きかったのは秘密だ。

「もちろん模擬戦だよね?」

「うん。銃は無し。でもあたしはサイコキネシス――異能を使うから、あんたも魔術を使って」

「わかった。船倉から木刀を持ってくる」

「あたしは5本要る!」

「了解。じゃあちよっと待ってて」

シオンは再び船内へと戻った。

★☆☆★

船倉は船の最下階にある。

そして、牢獄室はその上階にある。

今その牢獄室には、一人の少年が繋がれていた。

アルース・ジェヴィア。14歳。海賊見習いに扮装していた海賊。彼は何者が階段を下りてくる足音を耳にした。

「よう、シオン・アーミラー！ 俺はお前に銀貨5枚賭けるぜ！」
格子から手を出して振りながら、アルースは叫んだ。

足音が一瞬止まり、すぐにその足音の主がこちらに向かって来る。
「……何で僕だとわかったんだ？ それに僕たちが模擬戦をすることもどうやって知った？」

牢獄室の入り口にシオンが姿を現した。

「昔から耳が良くてね。だからスパイをスパイするなんて役目を任されたのさ。もしかしたら俺のこの聴力も異能なのかもしれないな。まあ俺としては、不老不死の方がはるかに魅力的だと思うが」

それも聞こえていたのかと、シオンはひどく驚いていた。

「……やれやれ、最近やけに異能力者との縁が多いな。リリアにライルにお前。それに昔からの縁のディレム。いつから異能は珍しくなくなっただ？」

「……それで、何の用だ？ 昼飯にはまだ早いぞ」

「いやあ、一つ聞いておきたいことがあってな。ジルd……〈封魔弓〉は今どうしてる？」

「船長室に置いている」

それが嘘だとアルースはすぐにわかった。シオンの心臓の鼓動が変化したのを聞き取ったからだ。

「別に奪い返そうなんざ思ってたねえよ。そんなことしたくても出来ねえしな」

アルースは足かせをガチャガチャ言わせた。

「まあいい。その様子だとまだ気付いていないみたいだな」

「何のことだ？」

「そのうちわかると思うぜ。安心しろ。危険なことじゃないから」
「……ったく、お前、捕虜のくせに態度がでかいなあ……まあいいけど」

「さすが兄貴、心が広いねえ。おまけに男前。『命をかけて君を守るよ！』だっけ？ 尊敬するよ、兄貴！」

「こ、この野郎っ！」

シオンが格子から出ているアルースの腕へと猛ダッシュで飛びついた。

アルースは笑いながら手を引っ込め、危なげなく回避した。

「落ち着けて。誰にも言わないから」

「言ったらお前をリリアに委ねるからな！」

「うわ、それだけはお勘弁」

こうしていると、昨日までの関係に戻ったかのような錯覚に陥る。スパイのためとはいえ、あれはあれで楽しかったのかもしれない。アルースはそう思った。

「そうだシオン、あの地球人のことで一つ教えてやるよ。」

あのチビ、亡命することになった原因は知らないって言ってただろ？ あれはたぶん嘘だ」

「……嘘？」

「脈が少し速くなっていた。嘘じゃないとしても、あのチビが何か隠してるのは間違いないと思うぜ」

06 非力な少女（後書き）

お時間頂きありがとうございます。
更新ペースは1話／週を心掛けます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1531w/>

地球人亡命中！

2011年11月13日11時37分発行